出光美術館研究紀要第二十三号抜刷
二〇一八年一月三十一日発行

# 茶会記・蔵帳から見た江戸時代萩焼ブランド化への道

徳留大輔

# 茶会記・蔵帳から見た江戸時代萩焼ブランド化への道

徳留大輔

はじめに
一、館蔵萩焼作品について
二、茶会記・蔵帳などに登場する萩焼
三、茶会記にみる唐津焼、高取焼と萩焼の比較
まとめ

## はじめに

「一楽二萩三唐津」。萩焼は楽焼、唐津焼同様に侘び数寄に適う茶碗として、高く評価されてきた。その歴史は戦国大名の毛利氏が、慶長九年（一六〇四）に萩（山口県）の地に封じられた後、萩藩の御用窯として開窯したことで始まる［註1］。その基本的な特徴は、唐津焼や高取焼等と同様に、朝鮮半島由来の陶技を基礎とした施釉陶器［註2］ということになる。しかし後述するように江戸時代の茶会記での登場回数や流通した量は、楽焼や唐津焼と比べると少ない傾向にある。萩焼とはどのような焼きものなのであろうか。平成二十九年四月から六月の期間、出光美術館で開催した「茶の湯のうつわ――和漢の世界」展の中で萩焼について検討を行ったが、特に茶会記に関する情報や『雲州蔵帳』など江戸時代の茶人たちの萩焼の使用や所蔵状況を他の焼きものと比較しながらの検討ができていなかったなどの課題を残した。そこで本稿では、館蔵萩焼作品の位置づけを行うとともに茶陶・萩焼が茶の湯の世界の中で受容されていった過程、一ブランドとして広まっていった様相について考察を行うことにする。なお本稿で扱う萩焼とは所謂江戸時代において焼造されたものを指す。

## 一、館蔵萩焼作品について

萩焼の編年に関して学史と萩焼の枠組みについて簡単に整理しておく。萩焼茶碗の編年に関する研究は、萩藩と茶の湯の関わりから美術史的に茶碗の様式および年代の変遷を理解しようとする研究と、窯跡の考古学的発掘成果をもとにした研究との大きく二つの方向性がある。先行研究によりすでに指摘されているように、窯跡発掘出土資料に関しては、今日まで伝世する茶陶と類似する製品が非常に少なく、それだけでは伝

図 1– 1　正面

図 1– 2　高台

図 1　萩割高台茶碗　江戸時代前期　高 8.8 cm　口径 13.4×13.1cm　底径 6.3 cm　重量 322.4g　出光美術館蔵

世する萩焼と考えられるものの年代的位置づけを行うことは難しい［註3］。そのため今日まで体系的な編年が確立していない状況にある。以前、発掘資料品と萩藩の茶の湯における動向を若干整理したが［註4］、ここでは当館所蔵作品と関連がある部分のみ簡単にまとめておく。

出土品の中には高麗茶碗を彷彿させる作例は少ないものの、萩焼の抹茶碗の特徴として、榎本徹氏により次のような指摘がされている。それは十七世紀末から十八世紀初めまで、「織部スタイルの強い影響下での茶碗づくり」と、とくに「彫三島と割高台など一つの作品に二つのタイプが融合している作例」が多い傾向にあるということである。そしてそれは小堀遠州が茶の湯の世界で指導的立場になってからもその製作傾向がしばらく続いたということである。それは十八世紀前半に操業がされていたと考えられる坂二号窯からも織部スタイルをイメージさせるような筒形茶碗や沓形茶碗、割高台と沓形茶碗を融合したような作例の茶碗を焼造していたことからも分かる。しかしその一方で、この段階では、井戸、熊川、呉器、割高台、三島手など各種の高麗茶碗の写しものが作られている。つまり様式的な特徴としては、十七世紀代小堀遠州の時代を迎えて以降も、高麗茶碗を意識しながらも織部スタイルの萩焼を作り続けていたという点は改めて注目しておきたい。

さて現在出光美術館では萩焼として所蔵する萩茶碗は五点ある。

作品①　萩割高台茶碗［口絵6・図1］

本作品は腰が張らずに口縁部から底部にむかって直線的にすぼまり、高台には二箇所切り込みを入れる。器表には轆轤目が残る。全面に化粧土を掛け、その上から全体に施釉をする。畳付には四箇所に目跡が残る

図 2– 2　高台



図 2– 1　正面

図 2　萩茶碗　銘　李華　江戸時代前期　高 8.3cm　口径 14.0×13.4cm　底径 7.1×6.8cm　重量 352g　個人蔵

［註5］。伝・初代坂高麗左衛門作とされる「銘　李華」［図2］と比べると胴部の荒い削りや高台の造形性などの違いはあるものの、うつわ全体に白化粧を施したりするなどの共通性もあり、江戸時代前期（十七世紀）の作例であると考えられる。

作品②　萩茶碗［図3］

造形的には呉器茶碗を倣ったと思われる萩茶碗である。轆轤挽きは手慣れており、器壁は薄く伸びやかさを感じさせる。やや粗い胎土に高台脇まで施釉し、一部、切高台部分から釉が入り高台裏まで釉薬が掛かっている。ただし基本的には高台畳付および高台裏は露胎となっている。胴中央から下にかけて横位にヘラ状の工具で削りを入れ、高台裏は兜巾状にしている。表面には貫入が広がる。高台を一箇所切り落として、割高台（切高台）としている。全体に薄作りで手取りは軽い。江戸時代中期後半（十八世紀後半）から後期（十九世紀代）の作例と考えられる。

作品③　萩茶碗［図4］

箱の蓋面には「玉川」「茶碗」と墨書で記されている。正面手前をすこし押し込む。枇杷色と紅色の中間的な色調。内外面ともに轆轤目を強調。表面には鉄が飛んでいる。腰から下はやや強めに削りを行う。釉薬は腰下付近まで施釉し、その下から高台裏までは無釉で露胎となり、濃い茶褐色を呈する。高台裏は兜巾状になる。見込みはやや深く、幅広の鏡を作っている。萩・山口に伝世する萩焼とは土味がやや異なり、しっとりした感触はあるが、焼きしまり硬い。類例が京都の個人蔵や欧州の美術館などに散見される［註6］。表面に部分的に白釉を掛け、景色を生

図 3– 2　高台

図 3– 1　正面

図 3　萩茶碗　江戸時代中期～後期　高 8.0cm 口径 12.2cm　底径 5.3cm　重量 223.9 g　出光美術館蔵

図 4– 2　高台

図 4– 1　正面

図 4　萩茶碗　江戸時代中期　高 8.0cm　口径 14.2×14.0cm　底径 6.6cm　重量 333.3g　出光美術館蔵

図 5– 2　高台

図 5– 1　正面

図 5　萩茶碗　江戸時代中期～後期　高 13.0cm　口径 13.3×13.0cm　底径 6.0cm　重量 275.7g　出光美術館蔵

図 6– 2　高台

図 6– 1　正面

図 6　萩餌袋茶碗　江戸時代中期～後期　高 8.6cm　口径 13.0×12.5cm　底径 5.7cm　重量 246.9g　出光美術館蔵

み出しており創意が見られる。十八世紀、江戸時代中期頃に位置づけられると考えられる。

作品④ 萩茶碗［図5］

全体的におとなしい姿であるが、正面部分をやや押している。高台付根付近まで白釉を掛け、高台部分は無釉で露胎であり、茶褐色を呈している。胎は精良でねっとりした質感が特徴であるが作品③と比べてより細かい。貫入が内外面ともに広がる。また幅広の畳付となっている。産地は萩でない可能性もあり、今後類品を確認した上で改めて産地および年代観を検討する必要性があるが、萩焼であれば江戸時代中期から後期にかけての作例であると捉えておきたい。

作品⑤ 萩餌袋茶碗［図6］

共箱の蓋面には高麗茶碗餌袋手と墨書で記され、同様の名称の札がつく。なお蓋と身の部分はもともと別物である。また朱漆の挽家を伴うが、蓋面には金字で高麗と記される。

椀形の姿を呈し、部分的に紅褐色を呈する。釉は腰下あたりまで施釉されるが全体に薄く掛けられる。腰下から高台裏は露胎で暗い茶褐色を呈する。高台裏は削りにより兜巾状に作ってはいるが、撫でているのか、焼成段階以前になだらかな表面になっている。外面には口縁下から胴中央上あたりにかけて沈線が巡っているが、轆轤で連続三回転しながら一気に施文している。胎土の質感は作品④に類似しており、やはり産地については改めて検討する必要があるが、萩焼であれば江戸時代中期から後期にかけての作例であると思われる。

## 二、茶会記・蔵帳などに登場する萩焼

先行研究において、茶会記に登場する萩焼に関する研究は磯野風船子氏［註7］が『槐記』と「会附」に登場する萩焼について、また谷晃氏［註8］が茶会に使用された器種やいつから萩焼が茶会記に見られるようになるかについての言及が行われている。萩焼の茶陶は花生、水指、香合も作られているが、谷氏の研究よると、水指や香合は茶会記では数例しか見られない一方で、茶碗は一〇〇回以上登場する。このことが萩焼＝茶碗というイメージを強くしている可能性があることを指摘している。また筆者も拙稿で若干茶会記に登場する萩焼に触れたことがあるが、ただ史料全体が紹介されるような形では行われていないので、ここでは可能な限り茶会記などの史料ごとに、記載された時代が古い順に整理しておきたい［附表］。

### 1 茶会記

①「有楽亭茶湯日記」［註9］

現在までに知られる中で茶会記に初めて萩焼が登場するのは、谷晃氏により初めて指摘されたのであるが［註10］、慶長十九年（一六一四）六月十六日の織田有楽の茶会での「白キ萩焼」の茶碗が初出とされている。現代における萩焼は枇杷色がその特徴とされているが、先述した当館所蔵作品［図1］のように江戸時代前期の萩焼の多くは、白化粧土を全体に施した作行が多い。その茶碗の色の雰囲気から「白萩焼」と記された可能性もある。ところで同茶会記にはその日付けに先んじて、慶長十七

年（一六一二）正月十九日の記録に茶碗「長門やき」とあり、後述するように萩焼を示す呼称に「長門」の語句もあることから、こちらも萩焼の可能性がある。

②金森宗和の茶会

金森宗和の茶会における萩焼の記載に関しては、「松屋久重茶会記」[註11]内における宗和の茶会と「宗和茶湯書」[註12]内に見られる。前者の茶会記に関して、松屋久重（一五六七～一六五二）は桃山時代から江戸時代前期の商人であり茶人である。松屋久政、久好、久重の三代の茶会記「松屋会記」には正保四年（一六四七）四月三日晩の金森宗和の会に多羅尾権助と久重が客として出席している。そこで「茶ワン、ハキ焼カ」とある。この会におけるその他の道具の詳細について産地や特徴が分かるものはない。また後者に関しては、承応二年（一六五三）四月三十日に薄茶碗用に萩焼を用いている[註13]。金森宗和の茶会には仁清焼が多いことが指摘されている中で、萩焼と思われるものは茶碗のみである。宗和の茶会記に登場する客の多くは町人であり、武家、公家は少ない[註14]。金森宗和は毛利家から直接萩茶碗を入手した可能性もあるし、あるいは緊密な関係にある公家から入手した可能性もある。いずれにせよ京の町人たちにとっては萩焼を手にし、見ることができた機会は必ずしも多いわけではなかったであろうが、このような茶会を通して京の町人たちに萩焼の存在は知られていったものと思われる。

③「江岑宗左茶会記」[註15]

表千家四代・江岑宗左（一六一三～七二）の茶会記である。江岑宗左は、寛永十九年（一六四二）に沢庵・玉舟和尚の薦めで紀州徳川家の茶道として出仕している。以降、表千家は紀州徳川家に茶道として仕えている。

萩焼は一六五〇年前後から登場し、古くは肩衝茶入、耳付茶入と種類が異なる茶入が二回、茶碗が三回、建水二回が登場している。

茶会の席主である渡部若狭守はおそらく紀伊和歌山藩主徳川頼綱に仕えた渡部直綱（一六〇一～八八）であると思われるが、渡部若狭守以外は、「ちそん」という人物がいる。ちそんは本法寺の知存であり[註16]、その他の二名も僧侶であると思われる。なお茶会ではないが、寛文十一年（一六七一）十二月五日の項目に、「宗旦判茶碗　ハキ焼　吉岡与介蓋ノ書付致」とある。千宗旦は一六五八年には没しているので、それ以前の萩焼ということになるが、宗旦判の茶碗がいかなる萩焼であるかは不明である。

④「御茶湯之記」[註17]および「槐記」[註18]

「御茶湯之記」は近衛第二十一代の予楽院家凞（一六六七～一七三六）の茶会記である。家凞は享保十年（一七二五）より予楽院と号している。さてその記録は正徳三年（一七一三）八月から享保二十一年（一七三六）のものであり、二十四年の間に三〇八回の茶会が行われている。なお家凞の侍医で茶人の山科道安（一六七七～一七四六）が記した『槐記』があり名和氏らの研究では、その『槐記』の情報も補完する形でまとめている。次に示すように萩焼の可能性があるものは二十九回登場している[註19]。

一番古くは正徳三年（一七一三）八月二十七日、最後は享保十九年（一七三四）四月二十九日である。

器種に着目すると二十九回のうち、一回が茶入で、残りはすべて茶碗である。なお茶入は享保十四年三月二十九日の茶会で用いられており、椥笥内府会である。どのような茶入の特徴であったかについては不明である。

茶碗に関しては、「萩」あるいは「萩焼」と記載されるものが最も多く、その他に「萩焼白」[註20]（一回）、「長門萩」（一回）、「長州萩」（一回）、「甲斐守手焼」（一回）、「萩　花三嶋ノ手」（一回）、「新萩」（一回）、「萩焼雲鶴絵」（一回）、「平茶碗」（一回）と記載されている。このことから、萩焼の呼称としては、「萩」以外に長門、長州といった藩名や地名と関わるもの、毛利家の官職名と関わるもの、器の形状や特徴と関連するものがあることが分かる。また「新萩」の名称が見られる。この「新」とは当時における同時代のものであり、「古」に対しての言葉であるものと推測される。「古萩」の語句が最も早く茶会記に現れるのは明和五年（一七六八）『穆公茶会記』と指摘されているが[註21]、おそらくは十八世紀の前半期頃にはすでにその考えはあった可能性が高いことを示している。

さて茶碗の中でもその特徴の詳細が分かるものについて考えてみると、「萩焼白」は、おそらく器全体に白化粧を行った茶碗であると思われ、先の織田有楽の茶会記にもある「白キ萩」と同様の特徴をもった茶碗である可能性があるものと思われる。また『槐記』享保九年十一月六日条に「長門ヨリ献上ノ萩」とあり、毛利家からの献上品であることが分かる。「萩　花三嶋ノ手」は三島手のものであろう。「萩焼雲鶴絵」は、『槐記』によると「萩、赤ノ手、白薬ニテ雲鶴ノ模様アリ」とある。現存伝世する萩焼作品の中にも地が赤色を呈し、胴部に立鶴を表し、鶴



図 7– 1　正面



図 7– 2　高台

図 7　萩立鶴茶碗　江戸時代前期　高 9.3cm　口径 10.3cm　底径 5.1cm　重量 376.0g　個人蔵

8–1　8–2　8–3

8–1　享保十一年四月二十一日の茶会に登場する萩茶碗
8–2　享保十六年十一月二十二日の茶会に登場する萩茶碗
8–3　享保十七年正月七日の茶会に登場する萩茶碗（この茶碗に雲鶴文があると茶会記には記されている）

図 8　『槐記』に描かれた茶碗の絵

文様の周りも白釉を散らして雲の雰囲気状に見える作例が知られ［図7］、『槐記』に描かれた茶碗の形［図8－3］とは同一ではないが、おそらく同様の作行であったと思われる。また、萩焼古窯の出土品には十八世紀以前には平茶碗の事例は少ないが、享保十九年（一七三四）四月二十九日の茶会で「平茶碗」が用いられている。

⑤酒井宗雅の茶会記『遠好日記』［註22］

酒井家二代の姫路城城主である酒井忠以（安永元年に雅楽頭となる。号は一得庵、宗雅、遠好庵など）の茶会に関する資料は『遠好日記』が知られる。計三巻からなり、天明七年（一七八一）から寛政元年（一七八九）にわたり、江戸と姫路での自会記・他会記あわせて合計一七九会が記録されている。宗雅は松平不昧から茶の湯に関して直接手ほどきを受けている大名茶人である。また後述する松平不昧の『雲州蔵帳』に関して、宗雅の没後、酒井蔵帳より名器の多くが不昧のもとに渡っていることが指摘されている［註23］。その『遠好日記』の中では四会の茶会において萩焼の記載が見られる。いずれも茶碗であり、「萩」「古萩」のほか、「萩割高台」の名称が見られる。武家の茶会記の中でまとまった萩焼の名称が見えるのは、織田有楽の茶会記で二回見られたのを除くと、これまでのところ酒井雅楽の茶会記が古い事例ということになる。

この酒井雅楽の茶会より少し遡る例として讃岐高松藩主・松平頼恭、頼真らによる『穆公茶会記』の中でやはり古萩茶碗が登場（明和五年〈一七六八〉）しており［註24］、この頃から大名・武家の茶会記の中で萩焼が登場する事例が増えている傾向にある。

⑥盛岡藩の茶会記（山本秀郎家文書の茶会記）［註25］

盛岡藩南部氏に茶事をもって仕えた山本平次茂済は、盛岡藩の南部利視公の享保十三年（一七二八）五月、江戸において茶事をもって御使者給仕に召し出され、茶名を久茶と称した人物である。その山本家には古文書が残っており、山本秀郎家文書「茶会記」で萩茶碗が一回使用されている［註26］。この茶会記の詳細に関しては、今回確認できなかったが、宝暦以降から文化七年頃（一七五一～一八一〇）までの茶会の資料等とされている。なお、この文書を通して盛岡藩の茶道の拝見を考察した梅原氏は、表千家八世宗左（叶翁・啐啄斎）までの係わり、それ以降は主に川上不白と盛岡藩の茶道との関係が強いことを指摘されている。ちなみに不白は宝暦以降、南部のみならず、豊後、有馬、薩摩さらには長州などの茶道指南役を行っていることには注目しておきたい。

⑦井伊直弼と彦根藩の茶会記［註27］

井伊直弼および同時期の彦根藩の茶会に関しては、熊倉功夫『史料井伊直弼の茶の湯（下）』の中にまとめられている。その中で萩焼が登場する茶会史料は、『彦根水屋帳』『毎会水屋帳』『順海水屋帳』『懐石附』『安政六年よりの水屋帳』『安政・万延年間水屋帳』および『一紙もの茶会記』がある［註28］。全体で見ると嘉永五年（一八五二）から安政六年（一八五九）までの記録である。

それぞれの茶会記に関しては、谷端氏が詳細にまとめられており、それを参考にすると、これらの茶会における席主は井伊直弼および直弼の配下の彦根藩士であり、また客の大部分も家臣や菩提寺の僧侶となっている。その中でも『東都水屋帳』には他大名（萩茶碗を用いた会でいえば松

図 9　呉須絵松竹梅図茶碗　江戸時代後期　高 10.5cm
口径 12.5×13.5cm　底径 6.3cm　重量 403.0g
岩国美術館＋柏原コレクション蔵

平越後（美作津山藩主松平斉民）や幕府茶道役（谷村可順）を招いた会もある。

さてまずここで注目しておきたいのは、茶会記に記された萩焼の呼称である。一回だけ「松本萩」（安政五年〈一八五八〉二月十一日の茶会）と「松本」の名称が見られるが、基本的に「萩」という名称になっており、長門、長州の名称は見られない。次に萩焼の捉え方であるが、それ以前にすでに見られるように古萩、新萩との呼称が複数回見られ、この呼称も一般化しているようである。中には一回ではあるが、古萩高麗左衛門作（安政四年〈一八五七〉四月三日）と記載されている。また器形や様式的特徴が分かるものとしては、薄茶碗として「萩ひら形」、つまり平茶碗（安政三年九月二十日）、新萩筒と記された筒茶碗（安政四年正月十三日）がある。さらに絵萩の茶碗が二回（安政四年五月九日、同六年二月十九日）登場している。これは幕末に呉須で絵付けをする萩焼の茶碗［図9］の存在が知られているが、おそらくそのような作例のものであると考えられる。伝世する事例では山口以外の地でほとんど目にすることがない作例であるが、この絵萩が他藩にも伝わっていたことになる。また「萩写」（嘉永五年十一月九日）の茶碗が存在していることは興味深い。

⑧小結

以上、本項では茶会記に見られる萩焼の様相を概観してきた。谷晃氏がすでに指摘されているように萩焼が茶会記において登場するのは、織田有楽の茶会を初めとしている。その後、幕末にいたるまで一〇〇会以上の使用例があるようである（今回は九十八会分を確認できた）が、圧倒的に茶碗の使用回数が多いことを改めて確認するにいたった。

茶会記の特徴を見てみると、十七世紀前半に織田有楽の茶会での使用例が見られるものの、十八世紀中頃まで京などを中心に、公家（近衛家熙）や茶人（江岑宗佐）などによる茶会での使用例が目立つ。延宝八年（一六八〇）正月二十日には御所内での後西院の茶会で長州萩の茶碗が使用されている［註29］。

茶碗は十八世紀前半までは萩焼のほか、長州、長門などの呼称もあるが、それ以降は「萩焼」が基本的な名称となっている。また織田有楽の茶会記に見える「白キ萩焼」や近衛家熙の茶会記に見える「萩焼白」の名称などは当館の館蔵品［図1］にもあるような化粧土を全体に施す萩焼の初期にタイプに近いものであると思われる。また古萩の名称に関しては、明和五年（一七六八）の『穆公茶会記』の事例が現在までのところ最も古い事例であるが、正徳三年（一七一三）には新萩焼という名称もあり、すでに古くから伝世する萩焼と当時における現代の萩焼とい

う認識なのであろうが、あえて新という語句を用いていることから、この頃には古萩に対する認識が生まれ始めていた可能性も考えておきたい。また江戸時代後期では彦根藩の藩士も頻繁に萩茶碗を使用しており、広く萩茶碗が認知され受容されていたことが推測される。

茶碗以外に関しては使用例がほとんどなく、また谷晃氏がすでにまとめられているが、花入の記録はない。また今回史料にあたることはできなかったが、香合は文化七年（一八一〇）二月五日の紀州徳川家の茶会で「古萩丸」が見られ、以降五回香合の使用例があるとされる。水指は時期の詳細は不明だが、元禄頃に摂津池田の九品寺茶会「元萩」とあり、その他四回の使用例、蓋置きは天明三年（一七八三）二月十三日に藪内家七代の竹翁が「萩」を使用している。建水はいずれも彦根藩の関連する茶会で登場している。そのうち一回はどのようなものであるかは不明であるが「建水　古萩」とある。茶入は萩焼古窯の出土例を見ると唐物写しを作っていることが分かっており、また毛利家にも茶入で伝世しているが、『江岑茶会記』の中で、正保四年（一六四七）十一月三日の項で登場する萩焼肩衝のほかに萩焼耳付、また『槐記』でも萩焼の茶入が一回登場しているがやはり使用回数は極めて低い。

さらにここで注目しておきたいのは、小堀遠州の茶会記『小堀遠州茶会記集成』［註30］に萩焼は見られない一方で、後述するように遠州七窯として知られる高取などは頻出していることである。また遠州の茶会には毛利秀就をはじめ、秀元なども参加しているので、小堀遠州の茶の湯の嗜好などは萩藩としては当然認識したであろうし、また遠州も萩焼の存在は十分に認識していたであろうが、萩焼の積極的使用は見られない。また、江戸時代中期、奥州仙台の第四代藩主で、大名数寄者として名高い伊達綱村（一六五九～一七一九）の茶会記『伊達綱村茶会記』［註31］は、元禄六年（一六九三）から宝永二年（一七〇五）に江戸の藩邸と仙台城で行われた茶会の記録、合計全十七巻からなり、後述するように古唐津や高麗茶碗、また萩焼にルーツがある出雲焼などは登場するが、萩焼は見られないことには注目しておきたい。

### 2　蔵帳・道具帳

次に本項では茶人たちが蒐集した道具帳である蔵帳を中心に萩焼の動向を見ておきたい。

#### ①織田有楽・長好の道具帳

『正伝永源院文書』の中に、織田有楽の数寄の道具帳がある［註32］。この中に「はきやきの茶垉壹ッ」とあり、さらに「本文書ハ長好ノ自筆ニカカル、」とある。長好とは織田有楽の孫の織田長好（一六一七～五一）のことであり、有楽流を継承した茶人である［註33］。萩茶碗の形態の特徴は不明であるが、同書中の寛永十五年寅十月六日付けの（織田有楽）御数寄道具之帳［註34］の中には萩焼の名称は見られないことから、この長好が所持していた萩焼は有楽から継承されたものなのか、あるいは長好の代に蒐集にいたったのかは不明である。なお、織田長好の没後のその遺品が分配されているが、その記録帳である『織田三五郎遺品分配目録』［註35］中には萩焼は含まれていない。

#### ②『雲州蔵帳』

『雲州蔵帳』は、松江藩松平家に秘蔵されてきた、松平不昧遺愛に関

図 10　雲州蔵帳（参考舊帳六冊）　江戸時代後期
28.0×21.0cm　出光美術館蔵

わる茶道具類が記録されたものである。『雲州蔵帳』の原本は不昧が六十一歳の時、つまり文化八年（一八一一）に編んだものとされている。いくつか流布本がある中で、出光美術館が所蔵する所謂『雲州蔵帳』は、『参考舊帳　御茶器帳』六冊と『貴重品目録』[註36]五冊からなる。『参考舊帳　御茶器帳』六冊[図10]は桐の箱に収納された雲州松平家の茶道具目録で、宝物之部、大名物之部、中興名物之部、名物並之部が各一冊、上之部が乾・坤二冊の計六冊が、不昧好みの鼠色の表紙で袋綴に仕立てられている。筆写は幕末の頃とされている。当館が所蔵する『雲州蔵帳』の中には、唐津や高取の名称は見られるが萩焼に関しては記載がない。しかし『雲州蔵帳』には中之部、下之部があることが分かっている[註37]。中之部には茶道具一〇四点が記載され、上之部に継ぐべき茶器類で構成され、下之部の一〇三点は赤坂の上屋敷や大崎の下屋敷において、通常の茶会に使用する器物や自ら創意工夫から好んで作られた茶器のうち優れているものが含まれているとされている[註38]。このうち下之部の「茶盌」の項目の中で萩と新萩の名称が見られる。器形などの特徴は不明であるが、通常の茶会などには萩焼は用いられていた可能性が高い。また下之部の茶碗は全体で七点記載されている中の二点であるので、通常の茶会に使用する器としては十分に評価されていたものと言える。

③「江戸小箪笥茶器入改正」[註39]

彦根藩が嘉永六年（一八五三）十月に調査した江戸における茶道具リストで書誌の外題は井伊直弼の直筆とされている。この茶道具道具帳には「上々」「上、格好ヨシ」などの茶道具のランク付けと思われる記述などもある。収録されている道具類は大名物クラスのものは含まれてはいないが唐物を含む茶入や薄茶器をはじめ、各種茶碗がある。濃茶茶碗のリストの計三十一碗の中には、井戸茶碗や熊川茶碗など高麗茶碗が数多く入っているが、志野、黒織部、瀬戸黒のほか、「一古萩　濃茶三人詰　無疵　上々　ひしけ形」とある。また筒茶碗は八点リスト化されているが、祥瑞、信楽の他に「〇一萩筒茶碗　無疵」、「一萩焼異風形　高麗左衛門作　上々無疵」とある。

④矢倉蔵帳[註40]

詳細な年代は不明であるが、藤村庸軒（一六一三～九九）の門下の江戸中期の茶人である山本退庵の系譜にある矢倉家に所蔵された道具帳である『矢倉蔵帳』には茶碗の項目の中に、「萩　花摺」とある。そして各

種の道具類をリスト化した一番最後に、珍器七種、後七種、七種名物と格付けを行っているが、萩茶碗（銘花摺）は珍器七種の一つとされ珍重されるにいたっていることも萩焼の茶碗が広く受容されるようになっていることを物語っている。

⑤小結

萩焼は楽焼や唐津焼、また瀬戸と比べて茶陶の生産開始年代が遅い。また所謂「名物」などの茶陶がなく、「遠州蔵帳」［註41］、「八幡蔵帳」［註42］、「酒井蔵帳」［註43］、「土屋家蔵帳」［註44］、また「鴻池道具帳」や昭和十五年の売り立て目録［註45］にも見られない。この他、徳川美術館などに萩焼が所蔵されているが、その来歴などは不明であり、また「茶道　古美術　蔵帳集成」にある徳川家に関する蔵帳内には萩焼の名称は見られない。以上のことから、萩焼は当初、あまり評価が高くはなかったものと思われる。しかし、江戸時代後半には大名茶人たちの中でも重要な蒐集品の対象となっていたものが松平不昧や井伊直弼の道具帳から伺い知ることができる。また表千家八代の啐啄斎（一七四四～一八〇八）も萩茶碗を収蔵している。啐啄斎は父の如心斎の高弟の川上不白と親交が深かった。毛利家は天明三年（一七八三）に前藩主重就が隠遁し、防府の三田尻御茶屋に川上不白の設計による茶屋「花月楼」を建てるなどの関係があり、そのような背景の中で啐啄斎は萩焼を蒐集するきっかけになった可能性もあろう。

茶会記も十八世紀中頃以降、武家の茶会でより目にするようになるが、このような道具の蒐集も時期的に重なっていることをここでは指摘しておきたい。

3　その他の史料

ここでは萩焼に関して触れられている記録などから江戸時代における萩焼の評価やイメージについて整理しておきたい。

①松江重頼編『毛吹草』［註46］

松江重頼（一六〇二～八〇）により編集された俳諧論書である。正保二年（一六四五）に刊行されているが、序文には寛永十五年（一六三八）一月に成立したとある。『毛吹草』巻第四には諸国より出ずる古今の名物が紹介されている。この中で長門の国には、萩（ハキ）焼物の名称が見られる［註47］。萩焼がどのような造形や意匠の特徴があったかについては不明であるが、この頃少なくとも萩焼は世間において、ある程度の認知度があったこともものと思われる。

②『毛利秀元卿家譜』［註48］

『萩の陶磁器』をまとめた山本勉弥氏がその写本を所蔵し、同書の中で萩藩初代藩主・毛利秀就の後見人で、叔父の初代長府藩主・毛利秀元が江戸で二回、将軍家光を招待して大饗宴を催したとある。そのうち第一回目は、寛永十七年（一六四〇）に品川御殿において、将軍家光や相伴衆五〇〇人を招いて茶会を催している。そこでは各種の茶器類が記載されている中で、最後に「なお、お土産ものとしてお茶屋の棚や、芝生の上に並べた今焼の茶入れ、茶碗、香炉、花入れ、徳利など一千余個は、将軍はじめ、目利き次第、思い思いに持ち帰らせた」とあり、この今焼とは萩焼の可能性が高く、萩焼を茶器として用いかつ、ここでは土産品として贈答しているものと考えられている。

③草間和楽著『茶器名物図集』［註49］

茶器名物図集は松平不昧の『古今名物類聚』（寛政九年（一七九七））の後、三十年後に編まれたものである。本書に関しては、市井の一町人によるものであるが、大阪の豪商の鴻池蔵帳などの資料類を基礎にしながら体系的な茶道具集であり、『古今名物類聚』とならぶ近世後期の茶道具美術史上の双璧をなすものと評価されている［註50］。このうち国焼茶入之部と国焼名物茶碗之部で萩焼についての記載があるが、基本的に茶入之部に茶碗が著名であり、茶入は基本的に萩焼にはないことが記されている［註51］。その中には初期の萩焼に関する認識もあるので、茶入之部の一部を抜粋してみたい。

長州萩焼　高麗左衛門

是は茶碗のみありて茶入なし、ありても時代新し、今萩焼の古きを高麗左衛門といふ、是は根来高麗より日本へ渡りしもの、（中略）、古萩焼は世に多くあれども、高麗左衛門は稀なり、萩焼にも百年以来は白唐津の如き薬になりて、古萩には一向類せず、時代により土薬も変化せること考ふべし、右高麗左衛門の子孫今にありて、国君御用のものは此もの焼くといふ、此薬は古萩の茶色薬にて薄茶色なり、土製麁にして荒しし、今の売物は村民のみ焼くなり、今賞翫する茶碗の類、茶色薬にてへらめ等有之、割高台又は丸高台有之、古萩といえども皆遠州時代なり、又香合もあり、古萩は水さし鉢等なり、茶入等はなし、或は粉引・熊川等に似る出来もありて元来器用なる竈なり、長州領内松本村に坂新兵衛・三輪十蔵・林弥四郎とて陶家三軒今にあり　（傍線は筆者加筆）

ここで注目しておきたいのは、十九世紀の初頭において、同時代の萩焼は白唐津のような薬、あるいは色調を呈しているということである。石崎氏が指摘するように［註52］、これが斑唐津のような藁灰釉をまとったものであるかは不明ではあるが、いずれにせよ当時の萩焼と古萩の様子は異なるということが記されている。萩焼古窯の発掘調査の結果を見ると、藁灰釉の陶磁器片は十七世紀代には基本的に見られず、十八世紀から十九世紀にかけて見られる傾向があることから、「白唐津のような」とは、藁灰釉をまとった作例のことを述べている可能性もある［註53］。また当時古萩とされる茶碗の釉色は浅黄色で、高麗茶碗のように茶色あるいは薄茶色であると認識されていることである。つまりこの頃には全体に白化粧をまとうような白っぽい色を呈する萩焼は古萩とは広くは認識されていなかった可能性があるということである。ただし例えば宝暦六年（一七五六）では萩藩の支藩である徳山藩からの注文において江戸御用のために松本萩茶碗の黄薬焼、白薬焼を焼造することを具体的に指示しており、産地ではその違いは明確であった可能性もあるが、本件に関してはいずれにせよ検討課題としておきたい。

④小結

このようなイメージが生じたきっかけはこの頃の萩焼の位置づけとも関係している可能性もある。つまり高麗茶碗ではないが、その系譜をひくものであり、茶の湯のうつわにふさわしいというイメージが形成されているものと考えられる。そしてそれは萩焼は基本的に茶碗であり、十八世紀の後半から十九世紀初頭、つまり江戸時代中期後半から後期にかけては基本的には萩焼＝茶碗という考え方が一般的になっていたことを

物語っていると思われる。

## 三、茶会記にみる唐津焼、高取焼と萩焼の比較

本節では、先行研究を参考にしながら、同じ朝鮮半島の陶技の系譜をひく唐津焼、さらに同系譜をひきながら遠州七窯の一つである高取焼の茶会記に登場する様相を整理、萩焼のそれと比較することで、江戸時代における萩焼ブランドの形成過程を考察してみたい。

まず茶会記に見られる唐津焼を見てみたい［表1］。茶会記に現れる古唐津については、藤原友子氏の研究［註54］があるが、古くは慶長八年（一六〇三）には『松屋会記』に登場し、すでに慶長期に何度も登場している。そしてそれは茶碗だけでなく、茶入、水指、鉢、皿など多種にわたる。とくに注目されるのは、古田織部が唐津焼の道具を所持し、慶長七年から十三年にかけて盛んに用いていたことである。つまり茶陶として唐津焼が古田織部のもと盛んに用いられていたことで、ブランド化が進んでいたと言える。織部没後、一時期茶会記における登場回数は減少するが、伊達綱村の茶会記に見られるように十八世紀においても、その名声は継承され続けている。茶会記以外にも『雲州蔵帳』を始めとする大名茶人たちの蔵帳にも唐津はほとんど登場している。例えば出光美術館が所蔵する『雲州蔵帳』の『御茶器上之部　乾』［図11］では茶碗は六十六点のうち、「古唐津　銘　秋夜」［図12・13］をはじめ六点が唐津焼である［註55］。また幕末の井伊直弼の茶会記にも頻出されることから、唐津焼の茶道具は茶人たちに江戸時代全時期を通して広く知れ渡り使用されていたことが分かる。

| | 時期 | 茶碗 | 水指 | 水瓶 | 水滴 | 花生（花入） | 茶入 | 鉢 | 皿 | 酒次 | 香炉 | 香合 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 松屋会記 | 1533-1650 | 1 | 10 | | | 1 | | | | | | | |
| 宗湛日記 | 1586-1613 | 1 | | | | | 1 | | | | | | |
| 宗甫古織へ御尋書、織部茶会記 | 1599-1615 | 14 | 18ヵ | 6 | | 6 | 2 | | 9 | 2 | | | 慶長14（1609）年以降は唐津は見られない |
| 遠州茶会記 | 1600-47 | | 2 | | 2 | | | | | | | | |
| 金森宗和茶会記 | 1650-56 | | | | | 1 | 6 | | | | | | 180回の茶会 |
| 土屋家蔵品目録 | 1641-1722 | 2 | 1 | | | | 1 | | | | | | 土屋政直所蔵品。小堀遠州に学ぶ |
| 鴻池家道具帳 | 1691 | 1 | | | | | | 1 | | | | | 「元禄四歳、正月壱日」 |
| 鴻池家蔵器控 | | 1 | | | | | | 1 | | | | | 中尾唐津茶碗（中興名物） |
| 伊達綱村茶会記 | 1693-1704<br>1716-19 | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | | | ○ | | 約1400回の茶会のうち120回唐津焼登場。遠州所持と伝えられるものもある |
| 槐記 | 1724-35 | 5 | | | | | | 1 | | | | | 近衛家熙の茶道見聞録。96回の茶会の中で7つの茶会に登場 |
| 御数寄屋御道具帳 | 1729 | ○ | | | | | | 1 | | | | | 享保14酉己年。尾張徳川家の御数寄屋道具帳。茶碗以外は未確認のため、実際には所持していた可能性がある |
| 以心庵会席付 | 1754-91 | 3 | | | | | | | | | | | 佐賀藩士ヵ |
| 尾張家茶器目録 | 1859 | | | | | | | | | | | 1 | 安政6年 |

表1　茶会記に見られる唐津焼
（藤原友子「茶会記にみる唐津焼」『土の美　古唐津-肥前陶器のすべて』2008年、をもとに各道具帳・蔵帳分資料を追加・作成）

図 12　奥高麗茶碗　銘　秋夜　桃山時代　高 8.8cm
口径 15.4cm　底径 6.0cm　重量 481.5g　出光美術館蔵

図 11　雲州蔵帳（参考舊帳六冊）のうち『御茶器上之部
乾』の表紙　出光美術館蔵

次に高取焼である。高取焼も唐津同様に様々な茶会記や蔵帳の中にその名称を見るが、高取焼が広く認識されるようになったのは、「綺麗寂び」の世界を表わす遠州七窯の一つであることにも由来していると思われる。その小堀遠州の所蔵道具目録である『遠州蔵帳』に記載されている墨蹟類は四十九種類、花入は一〇二点、茶碗は一一〇余点、茶入は一

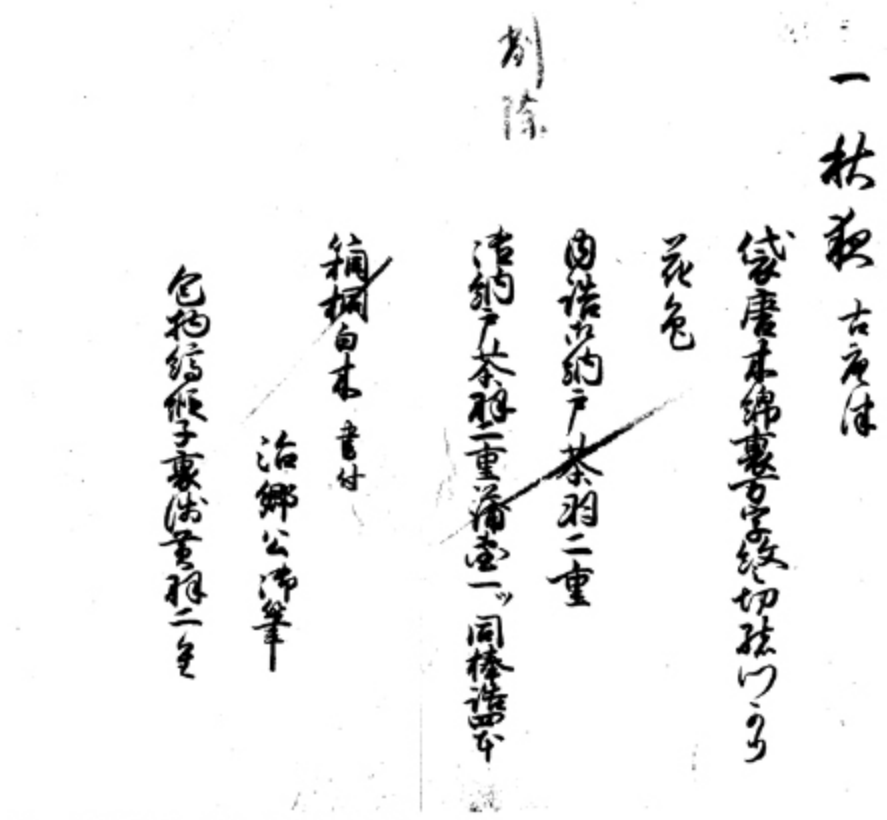


図 13　雲州蔵帳内の「銘　秋夜」の掲載部分

六〇種類であるから、いずれの道具も実際に茶会に登場するのは、所蔵道具の内の数パーセントである。遠州茶会記に見られる茶会は四〇〇会余りに及ぶが、主要な道具は繰り返し何回も用い、「もてはやしていた」ことが指摘されている［註56］。

では実際に遠州の茶会記における高取焼の登場回数を見てみたい［表2］。

高取焼の編年で見ると、所謂遠州好の様式美は白旗山窯から始まるとされる。その窯の操業年代は一六三〇年からとされ、その前段階の内ヶ磯窯は一六一五年から三〇年頃とされるが、遠州の茶会記には内ヶ磯の最終段階である寛永五年（一六二八）になるとすでに登場し、茶入、水指ともに複数回見られる［註57］。最後となるのは、正保三年（一六四六）であるが、その間、水指、建水と集中して繰り返して高取焼が用いられていることが分かる。なお唐津焼は寛永五年の五月と六月に水指、年は不明だが建水（水滴）が二回登場している。萩焼は見られない。

このような状況の中で改めて十七世紀の茶会記などに登場する萩焼の様相を示したのが表3である。

先行研究でも指摘されるように、萩焼は焼造開始当初、毛利藩の藩主らとの関係から、古田織部の茶の湯の価値観が萩焼の造形性にも強く影響があったとされている。織部没後、小堀遠州が「綺麗錆び」の理念を提唱し茶の湯を展開する中で、遠州好みの高取をはじめ、高麗茶碗や唐

| | 茶入 | 水指 | 建水 | 柄杓 |
|---|---|---|---|---|
| 1628 | 6 | 4 | | |
| 1633 | | 3 | | |
| 1636 | | | 1 | |
| 1639 | | 2 | | |
| 1640 | | 19 | 15 | |
| 1641 | | 8 | | |
| 1642 | 2 | 6 | 8 | |
| 1645 | | 8 | 1 | |
| 1646 | | 5 | 3 | |
| 不詳 | | 1 | 3 | |

表2　遠州の茶会における高取焼の使用頻度

| | |
|---|---|
| 慶長 17（1612）1.19： | 織田有楽の茶会。「長門やき」 |
| 慶長 19（1614）6.16： | 織田有楽の茶会。「白萩焼茶碗」 |
| | 織部没 |
| ※寛永 15（1638）： | 『毛吹草』の中で「萩焼」の呼称 |
| | 遠州没 |
| 正保 4（1647）4.3： | 金森宗和の茶会。「萩茶碗」 |
| 正保 4（1647）11.3： | 本法寺の知存。茶会。「萩肩衝」 |
| 慶安 3（1650）9： | 渡部若狭守。茶会（江戸）。「萩焼耳付茶入」 |
| 慶安 4（1651）3.7： | 天佑和尚。茶会。「萩焼茶碗」 |
| 承応 3（1654）6.4： | 金森宗和の茶会。「御室萩手」水指。萩写し |
| 寛文元（1661）10.20： | 仁徳の茶会。「萩焼茶碗」 |
| 延宝 8（1676）正月 20： | 御所内の後西院の茶会。「長州萩」 |

表3　17 世紀代における茶会記中の萩焼の一覧

津焼は見られる中で萩焼は見られない。まったく使用しなかったこともないのであろうが、好みのうつわ・産地の茶道具を繰り返し用いるという状況の中で萩焼が登場していないということは、萩焼は遠州の茶会でほぼ用いられていないと考えてよいであろう。ではその理由はどこにあったのであろうか。三つの可能性が想定されよう。それは、（A）茶陶・萩焼のブランド化が確立する以前であり、まだまだ十分に認知・評価されていなかった可能性、もう一つは（B）織部色の造形性が濃い萩焼を遠州が好みではなかった可能性、さらに（C）十七世紀前半頃は新しい高麗茶碗もあり、萩焼はこの段階はまだ高麗茶碗に代わる茶の湯のうつわとして珍重されるにいたらなかった可能性が考えられる［註58］。

萩焼は楽焼、唐津焼と比べその焼造の歴史がやや新しいため、当初、茶会で用いられることが少なかったとも言えるが、先に茶会記の箇所で触れたように、慶長十七年（一六一二）や十九年の織田有楽の茶会では萩焼は茶会記に登場するが、この段階は古田織部がまだ活躍している時代である。次に萩焼が茶会記で見られるのは、正保四年以降、一六四〇年代後半になってからである。小堀遠州が没後に萩焼は茶会記に見られるようになる。また興味深いのは今のところ十七世紀代に関しては江戸ではなく京都、そして武家の茶会というようは、公家あるいは公家との結び付きが強い茶人の茶会で見られることである。毛利輝元の長男で、初代長州（萩）藩の藩主・毛利秀就（一五九五～一六五一）は長女登佐姫を越後高田城主・松平光長に、二女竹姫を公家の最高の家柄である五摂家の鷹司房輔（一六三七～一七〇〇）［註59］に嫁がせている［註60］。

先述したように『毛利秀元卿家譜』あるいは萩藩の支藩である岩国藩における萩焼生産のあり方を見ると、積極的に萩焼は藩主の御遣物の茶陶として、将軍家、武家、茶人、寺社への進物や下賜品として用いられており、毛利家と鷹司房輔との婚姻関係を背景に朝廷や公家へも積極的に萩焼をご進物として用いていたことが考えられ、御所内の茶会でも登場しているものと言える［註61］。

そして遠州没後、十七世紀中頃、萩焼は公家や京都の茶人などの中で徐々に使用され、十八世紀になり釜山窯の閉窯もあり、朝鮮半島の陶技の系譜をひく高麗茶碗を思わせるうつわの一つとして表千家や武家の茶会の中でも広く用いられるようになったものと思われる。「古萩」という言葉も一七七〇年前後（例えば明和五年（一七六八）『穆公茶会記』、『遠好日記』天明七年（一七八七）十二月十九日）には用いられ、より古い萩焼も重宝されるとともに、アンティークとしての萩焼が高値で流通していることからも、十八世紀の後半頃には茶陶・萩焼は侘数寄の茶の湯を用いる茶碗として江戸や京の茶人たちを満足させるものとなり、ブランド化に成功していったものと考えられる。

## まとめ

以上、出光美術館所蔵の萩焼作品の位置づけ、および江戸時代における茶会記、蔵帳などから萩焼が茶の湯の世界の中で、広く受容される、つまり萩焼がブランド化が進んでいく過程を見てきた。

侘び茶の茶碗として非常に評価の高い萩焼であるが、その名声は江戸時代初期からではなく、段階を置きながら徐々に茶人たちに受け入れられるようになっていったことを明らかにした。また当初は茶碗以外の器種についても、その存在が萩藩以外にも知られ受容されたが、徐々に茶

碗が評価されるとともに、江戸時代中期後半から幕末にかけての十八世紀の終わりから十九世紀では、すでに萩焼＝茶碗のイメージ・評価が定まっており、それがいつしか「一楽二萩三唐津」[註62]と語られるようになったものと思われる。

謝辞

拙稿をまとめるにあたり以下の方々・機関に作品・資料調査に際して便宜を図っていただくとともに、多くのご教示を得ました。末筆ですが記して感謝申し上げます。

赤沼多佳、石崎泰之、伊藤嘉章、榎本徹、加藤祥平、後藤修、高木大輔、田原陶兵衛、坂悠太、新庄貞嗣、横山志野、岩国美術館、萩市陶芸家協会、山口県立萩美術館・浦上記念館、山口県埋蔵文化財センター（敬称略、五十音順）

註1―萩焼の開祖とされる朝鮮陶工の李勺光は、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に連れてこられたとの記録がある。一五九三年のことである。その後、当時の毛利家の拠点であった広島に滞在するが、これまでのところ広島の地でどのような活動を行っていたかについては不明である。

註2―展覧会図録『茶の湯のうつわ――和漢の世界』（出光美術館）のコラム1の中で萩焼については「朝鮮半島由来の陶技を基本とした軟質施釉陶器」と記述したが、軟質施釉陶器ではなく、施釉陶器の誤りである。軟質施釉陶器とは、低火度で焼成され、日本では奈良三彩や楽焼、また中国明時代の素三彩を写した楽焼や京焼などがある。萩焼は高火度焼成である。この誤記について、ここでお詫びして訂正いたします。なお本件については、赤沼多佳氏よりご指摘とご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

註3―石崎泰之「初期萩焼茶碗と高麗茶碗――その近縁性について」『高麗茶碗――論考と資料』（河原書店、二〇〇三年）。

註4―拙稿「江戸時代の萩焼の流通・消費の様相」佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学　第二巻』（雄山閣、二〇一六年）。

註5―目跡は五箇所見えるが、一箇所は切った高台部分。

註6―類例として伝来は不明であるが個人蔵で同様の質感をもったものが知られる。『古萩　江戸の美意識』（山口県立萩美術館・浦上記念館、二〇一二年）の図録中の作品番号一〇六の作品が類似する作例としてあげられる。

註7―磯野風船子「茶会記に記録された萩焼」『萩焼　土と炎の芸術』（朝日新聞社、一九七六年）、一一二頁。

註8―谷晃「茶の湯における萩焼の受容」『古萩――江戸の美意識』（山口県立萩美術館・浦上記念館、二〇一二年）。

註9―東京大学史料編纂所『大日本史料』第十二編之三十九　御水尾天皇自元和七年十一月至同年十二月、一九五八年、一七〇～二三二頁。「有楽亭茶湯日記」の掲載。渡辺良次郎「有楽亭茶湯日記の一考察――特集・歴史と文化」『國學院雑誌』第六三巻第一〇・一一号、九一～九九頁。

註10―谷晃「茶の湯における萩焼の受容」『古萩――江戸の美意識』（山口県立萩美術館・浦上記念館、二〇一二年）。

註11―千宗室編『茶道古典全集　第九巻』（淡交新社、一九五七年）、四三二～四三三頁。

註12―谷晃『金森宗和茶書』（思文閣出版、一九九七年）。

註13―谷晃『金森宗和茶書』（思文閣出版、一九九七年）、二七三頁。

註14―谷晃『金森宗和茶書』（思文閣出版、一九九七年）、四三四頁。

註15―千宗左監修、千宗員編『江岑宗左茶書』（主婦の友社、一九九八年）。

註16―谷晃「茶の湯における萩焼の受容」『古萩――江戸の美意識』（山口県立萩美術館・浦上記念館、二〇一二年）。

註17―熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、山崎佐和子校訂『御茶湯之記　予楽院近衛家の茶会記』（思文閣出版、二〇一四年）。

註18―千宗室編集『茶道古典全集　第五巻』（淡交新社、一九五七年）。

註19―槐記に登場する萩焼に関しては、磯野風船子氏も一部言及している。磯野風船子「茶会記に記録された萩焼」『萩焼　土と炎の芸術』（朝日新聞社、一九七六年）、一一二頁。

註20―この茶碗に関しては「養安拝領之」とある。

註21―谷晃「茶の湯における萩焼の受容」『古萩――江戸の美意識』（山口県立萩美術館・浦上記念館、二〇一二年）。

註22―栗田添星『酒井宗雅茶会記』（村松書館、一九七五年）。
註23―栗田添星『酒井宗雅茶会記』（村松書館、一九七五年）、七頁。
註24―谷晃「茶の湯における萩焼の受容」『古萩――江戸の美意識』（山口県立萩美術館・浦上記念館、二〇一二年）。
註25―梅原廉『盛岡藩の茶道――茶会記より』（江戸千家岩手支部、一九九二年）
註26―なお茶碗では、魚網屋（ととや）（一回）・イラホ（二回）・井戸（二回）・青磁（人形手）（一回）・高麗（二回）・熊川（二回）・金海（二回）などの渡来物は合計で十四回、楽（一回）・仁清（一回）・萩（一回）・出雲（二回）・唐津（二回）は合計七回使用されている。
註27―熊倉功夫『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』（彦根城博物館叢書3、彦根城博物館、二〇〇七年）。
註28―谷端昭夫「35彦根水屋帳」「36東都水屋帳」「37毎会水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』（彦根城博物館叢書3、彦根城博物館、二〇〇七年）。
『彦根水屋帳』：井伊直弼が藩主に就任して初入府後の嘉永四年（一八五一）十月二日から安政四年（一八五七）閏五月までに、彦根で行われた十六会の自筆自会記。客の大部分は家臣や菩提寺の僧侶。
『東都水屋帳』：井伊直弼の自会を含む二十八会の自筆自会記。嘉永五年（一八五二）十一月二十一日から万延元年（一八六〇）正月十九日までの記録。茶会は江戸で催された。
『毎会水屋帳』：井伊直弼と五名の彦根藩士が行った二十四会の茶会を記載。安政四年（一八五七）十一月一日から同六年二月十三日までの記録。
『順海水屋帳』：彦根藩士十六名の茶会十二会を記した茶会記。いずれも江戸で開催。安政四年（一八五七）十二月から同五年四月十三日までの記録。
『懐石附』：彦根藩士により江戸と彦根で開催された七十八回の茶会が記録。時期は嘉永五年（一八五二）二月二十日から安政五年（一八五八）二月まで。
『安政六年よりの水屋帳』：安政六年（一八五九）八月二十四日から同十月七日までの茶会四回を収録した井伊直弼の他会記。
『安政・万延年間水屋帳』：彦根藩士による安政六年（一八五九）八月二十四日から万延元年（一八六〇）二月十九日までの十回を収録した直弼の茶会記。
『一紙もの茶会記』：直弼、家臣、他大名が行った一会分の道具組を記した茶会記。
註29―谷晃「茶の湯における萩焼の受容」『古萩――江戸の美意識』（山口県立萩美術館・浦上記念館、二〇一二年）。
註30―小堀宗慶遺編『小堀遠州茶会記集成』（主婦の友社、一九九六年）。
註31―酒井巌『伊達綱村茶会記』（中央公論事業出版、一九六八年）。
註32―東京大学史料編纂所『大日本史料』第十二編之三十九　御水尾天皇自元和七年十一月至同年十二月、一九五八年、三二三～三三二頁。
註33―東京大学史料編纂所『大日本史料』第十二編之三十九　御水尾天皇自元和七年十一月至同年十二月、一九五八年、三二四頁。
註34―東京大学史料編纂所『大日本史料』第十二編之三十九　御水尾天皇自元和七年十一月至同年十二月、一九五八年、三三五～三三二頁。
註35―東京大学史料編纂所『大日本史料』第十二編之三十九　御水尾天皇自元和七年十一月至同年十二月、一九五八年、三三二～三三九頁。小田桑作「織田三五郎遺品分配目録（正伝院蔵）」『茶道古美術　蔵帳集成　上巻』（国書刊行会、一九七七年）、三七―四二頁。
註36―『現存茶道具目録』五冊は、松平直亮氏が当時松平家に収蔵されていた茶道具の名品十四点を昭和十三年に当時の帝室博物館（現・東京国立博物館）へ寄贈しているが、その後に再編集された目録である。
註37―藤間亨監修、田部美術館編集『雲州蔵帳集成』（田部美術館、一九八三年）。
註38―藤間亨監修、田部美術館編集「雲州蔵帳集成について」『雲州蔵帳集成』（田部美術館、一九八三年）、三八頁。
註39―谷端昭夫「44　江戸小簞笥茶器入改正」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』（彦根城博物館叢書3、彦根城博物館、二〇〇七年）。
註40―小田桑作編「矢倉蔵帳」『茶道古美術　蔵帳集成　上巻』（国書刊行会、一九七七年）、二三三～二四一頁。
註41―小田桑作「遠州蔵帳」『茶道古美術　蔵帳集成　上巻』（国書刊行会、一九七七年）、九五～一八八頁。
註42―小田桑作「八幡瀧本坊蔵帳」『茶道古美術　蔵帳集成　上巻』（国書刊行会、一九七七年）、一八九～一九八頁。
註43―栗田添星「酒井蔵帳」小田桑作編『茶道古美術　蔵帳集成　上巻』（国書刊行会、一九七七年）、二八一～三〇五頁。
註44―小田桑作編「土屋家蔵器目録」『茶道古美術　蔵帳集成　上巻』（国書刊行会、一九七七年）、一九九～二三二頁。
註45―小田桑作編「鴻池家道具帳」『茶道古美術　蔵帳集成　上巻』（国書刊行会、一九七七年）、二四三～二六七頁。なおこの項目の中には、「鴻池家道具帳」、「鴻池家蔵器控」、「鴻池家（松筠亭）売り立目録」が所収。

註46―早稲田大学の古典籍総合データーベース（http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko18/bunko18_00043/index.html）にて『毛吹草』は公開されている。

註47―河野良輔「萩焼――萩藩窯の成立と発展」『古萩――その源流と周辺』（山口県立美術館、一九八一年）、一三八頁。

註48―山本勉弥「萩の陶磁器」『萩文化叢書第一巻』（萩市、一九五〇年）。山本勉弥著・森豊彦増補『萩の陶磁器』、一九七八年、一一五～一一六頁に再録。なお同書の中では「一楽二萩三唐津」の用語が見られる。

註49―草間直方著、永島福太郎監修、原田伴彦校閲『茶器名物図彙　上・中』（文彩社版、一九七六年）、（上）三三頁、（上）四二頁、（中）一五〇頁。

註50―草間直方著、永島福太郎監修、原田伴彦校閲「解説」『茶器名物図彙　上』文彩社版、七二五～七二六頁。高橋義雄『大正名器鑑　第八編』（宝雲社、一九二六年）、二二三頁。

註51―茶入に関しては巻四十一の国焼茶入之部の中で、高取、唐津、薩摩、仁清などともに、萩焼高麗左衛門之事とある。茶碗に関しては、巻五十二の国焼名物茶碗之部に白庵、瀬戸、唐津、薩摩などとともに高麗左右衛門、古萩茶碗之事と記されている。しかし、茶入之部で具体的に紹介する中で、萩焼には茶入はなく、茶碗が主であることが記されている。

註52―石崎泰之「古萩を観るために――近世期萩焼茶碗の造形性から」『古萩　江戸の美意識』（山口県立萩美術館・浦上記念館、二〇一二年）。

註53―山口県教育委員会編『萩焼古窯』（山口県、一九九〇年）、石崎泰之「古萩を観るために――近世期萩焼茶碗の造形性から」『古萩　江戸の美意識』（山口県立萩美術館・浦上記念館、二〇一二年）。

註54―藤原友子「茶会記にみる唐津焼」『土の美　古唐津――肥前陶器のすべて』（佐賀県立九州陶磁文化館、二〇〇八年）。

註55―「古唐津　銘　秋夜」は伝世する過程で奥高麗に位置づけられるようになっており、箱書には奥高麗とある。その他五点の唐津焼は、「古唐津　銘　真蔵院」「古唐津　銘　相生」「奥高麗（青出来）」「瀬戸唐津　時鳥」「瀬戸唐津　冬月」「古唐津（赤出来）」である。

註56―谷晃『茶会記の研究』（淡交社、二〇〇一年）。

例えば、茶入では：「在中庵」（三十九回）、「相坂丸壺」（十三回）、「膳所焼大江」（五回）、「高取焼」（九回）、「釣舟（瀬戸）」（六回）、「春慶瓢箪」（七回）、「飛鳥川」（六十九回）等。茶碗は、「利休ととや」（三十三回）、「染付（五十二回）、「高麗」（九十四回）、「瀬戸貫入」（十四回）、「呉器」（十回）等。水指は、「三島」（二十四回）、「膳所」（四十五回）、「島物（南蛮）」（十回）、「高取」（五十七回）、「瀬戸」（百回）、「備前」（四十三回）、「信楽」（三十六回）、染付（十三回）など。

註57―高取焼における白旗山窯の製品と遠州好みについては必ずしも一対一の関係にないことが梶山氏の最近の研究で指摘されている。梶山博史「謎の遠州七窯――伝承と実態の間隔」『研究紀要　第二六号』（野村美術館、二〇一七年）。

註58―遠州との関係で見ると、楽焼は武家階級の遠州流からは好まれず、織部流、有楽流、石州流からはそれ程の扱いを受けず、ノンコウ、一入の時代には困窮するとされるが、大阪・江戸の商業階級が発達する中で再び脚光を浴びるとされる（磯野一九七六）。しかし武家の茶会記に登場するのは、やはり桃山以来のブランド力がその根底にあったものと考えられ、それは唐津焼も同様であろう。磯野風船子「茶会記に記録された萩焼」『萩焼　土と炎の芸術』（朝日新聞社、一九七六年）。

註59―鷹司房輔は、右大臣（一六六一～六三）、左大臣（一六六三～六七）、摂政（一六六四～六八）、関白（一六六八～八二）を歴任している。

註60―山本博文『江戸お留守居役の日記――寛永期の萩藩邸』（読売新聞社、一九九一年）。

註61―吉積久年「徳山藩御用焼物を探る―近世期萩焼茶碗の造形性から」『古萩―江戸の美意識』（山口県立萩美術館・浦上記念館、二〇一二年）。

註62―しかし文字としては依然として江戸時代の文献からは確認できない。また明治一〇年（一八七七）年に刊行された蜷川式胤も萩焼が松本焼と深川焼が存在することは言及するが、「一楽二萩三唐津」というような形では紹介していない。蜷川式胤『観古図説陶器之部　第五巻』、十一～十二頁。

図版出典

図2、図7、図9『古萩展　江戸の美意識』より転載

図8『槐記』より転載

| 備考 | 出典 | 頁 |
|---|---|---|
| | 東京大学史料編纂所「御水尾天皇　自元和７年11月至同年12月有楽亭茶湯日記」『大日本史料』第十二編之三十九、1958年、170～232頁 | 79 |
| | 東京大学史料編纂所「御水尾天皇　自元和七年十一月至同年十二月　有楽亭茶湯日記」『大日本史料』第十二編之三十九　、1958年、170～232頁 | 219 |
| 江戸で開催 | 千宗室編「松屋久重茶会記」『茶道古典全集』第九巻、1957年、432～433頁<br>千宗左監修、千宗員編「茶湯参候覚」『江岑宗左茶書』主婦の友社、1998年 | 279、540 |
| | 千宗左監修、千宗員編「茶湯参候覚」『江岑宗左茶書』主婦の友社、1998年 | 281、536 |
| | 千宗左監修、千宗員編「茶湯参候覚」『江岑宗左茶書』主婦の友社、1998年 | 359、520 |
| 寛文10年（1670）九月朔日より翌12年正月7日までの江岑の道具書付の記録。異筆として以下。12月5日　一、宗旦判茶碗　ハキ焼　吉岡与介　蓋ノ書付致 | 千宗左監修、千宗員編「茶湯参候覚」『江岑宗左茶書』主婦の友社、1998年 | 183 |
| | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記　予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014年<br>熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記　予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014年 | 3<br>149 |
| | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記　予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014年 | 150 |
| | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記　予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014年 | 151 |
| | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記　予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014年 | 154 |
| 刑部大輔は進藤一葉。近衛家諸太夫。『槐記』7頁 | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記　予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014年 | 197 |
| | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記　予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014年 | 199 |
| | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記　予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014年 | 202 |
| | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記　予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014年 | 205 |

附表　萩焼の使用が確認された江戸時代の茶会記一覧表

| 西暦 | 年記 | 席主あるいは場所 | 参会者 | 器種 | 記載名称 | その他の道具 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1612 | 慶長 17 年 | 織田有楽 | 片桐市正（且元）、速水甲州、鈴木悦可 | 茶碗 | 茶碗　長門やき | （懸物）虚堂布袋、（花入）筒、（茶入）くさべや、（水さし）ひゃうたん、<br>鎖の間：如休宗忍　金剛三良　道也<br>（掛物）普化、（花入）角頭巾、白玉ヲ入、（茶入）宗吾茄子、（水さし）手頭、（茶碗）唐茶碗、（炭斗）新敷ふくべ |
| 1614 | 慶長 19 年　朝 | 織田有楽 | 驢庵、青木民部少、竹田城庵 | 茶碗 | 茶碗　白キ萩焼 | （懸物）養叟、（三象）蓮花、（茶入）大茄子、（水指）金ノ水さし |
| 1647 | 正保 4 年 4 月 3 日晩 | 金森宗和 | 多羅尾権助、久重 | 茶碗 | ワン、ハキ焼カ | （花入）瀬戸 |
| 1650 | 慶安 3 年 9 月 | 渡部若狭守 | | 茶入 | 茶入　萩焼耳付 | |
| 1651 | 慶安 4 年 3 月 7 日朝 | 天佑和尚 | 老父、宗長 | 茶碗、建水 | 茶入　萩焼耳付 | 茶碗萩焼、建水「はきやき」 |
| 1661 | 寛文元年 10 月 20 日昼 | 二徳（仁徳？） | 宗仁、左吉、佐助、元由 | 茶碗、建水 | 茶入　萩焼耳付 | 茶碗萩焼、建水「はきやき」 |
| 1671 | 寛文 11 年 12 月 5 日昼 | | | 茶碗 | 茶入　萩焼耳付 | 宗旦判茶碗　ハキ焼 |
| 1673 | 正徳 3 年 8 月 27 日 | 近衛家凞 | 松平紀伊守（信庸。1666 ～ 1717、丹波篠山藩第四代藩主）、久米伊勢守（正清。1651 ～ 1727） | 茶碗 | 茶碗　新萩焼 | （掛物）御子左俊忠卿、（花生）南蛮置花入、（釜）九輪、（水指）青磁浮牡丹、（香合）南京染付 |
| 1720 | 享保 5 年 10 月 7 日 | 近衛家凞 | 刑部、宗也 | 茶碗 | 御茶碗　萩焼 | （掛物）梅　一山画讃、（釜）蘆屋海棠文歯釜、（香合）南京絞手十二支字、（茶入）小川手尻膨、（水指）南蛮立鼓形、（花入）宗和ナタメ尺八 |
| 1720 | 享保 5 年 10 月 19 日 | 近衛家凞 | 千宗庵、久米元察 | 茶碗 | 御茶碗　萩焼 | 掛物）梅　一山画讃、（釜）蘆屋海棠文歯釜、（香合）シユタラ象眼、（茶入）葛城屑衝、（水指）南蛮立鼓形、（花入）柑子口大蕪胴 |
| 1720 | 享保 5 年 10 月 29 日 | 近衛家凞 | 深諦院殿、山科道安 | 茶碗 | 御茶碗　萩焼 | （掛物）梅　一山画讃、（釜）蘆屋海棠文歯釜、（香合）南京絞手十二支字、（茶入）小川手尻膨、（水指）南蛮立鼓形、（花入）常御作カスカイ一重 |
| 1720 | 享保 5 年 11 月 12 日 | 近衛家凞 | 吉田右近、今大路治部 | 茶碗 | 御茶碗　萩焼 | （掛物）一山画讃、（釜）あしや海棠文歯釜、（茶入）小川手、（水指）南蛮立鼓形、（花入）宗和ナタメ尺八、（香合）南京絞手十二支字 |
| 1723 | 享保 8 年 10 月 10 日 | 近衛家凞 | 刑部大輔、元察、宗也 | 茶碗 | 御茶碗　萩焼 | （懸物）阿仏消息、（釜）蘆屋柿　猿蓋、（香合）松鶴蒔絵、（茶入）木葉　橘姫手、（水指）南蛮壺、（花生）宗和尺八ヘケ |
| 1723 | 享保 8 年 10 月 21 日 | 近衛家凞 | 西王寺九峰、正林寺了岳 | 茶碗 | 御茶碗　萩焼 | （懸物）阿仏消息、（釜）蘆屋無文柿　猿蓋、（香合）松鶴蒔絵、（茶入）木葉　橘姫手、（水指）南蛮壺、（花入）常御作虫喰一重 |
| 1723 | 享保 8 年 11 月 15 日 | 近衛家凞 | 千草菴、左馬頭 | 茶碗 | 御茶碗　萩焼 | （懸物）阿仏消息、（釜）蘆屋無文　猿蓋、（香合）松鶴蒔絵、（茶入）木葉　橘姫手、（水指）南蛮壺、（花入）カスカイ曲二重常御作 |
| 1723 | 享保 8 年 12 月 8 日 | 近衛家凞 | 法金剛院自性院（仁和寺塔頭自性院大僧正孝宥） | 茶碗 | 御茶碗　萩焼 | （懸物）石室画賛、（釜）蘆屋無文　猿蓋、（香合）松鶴蒔絵、（茶入）木葉　橘姫手、（水指）南蛮壺、（花入）宗和ナタメ尺八 |

| 備考 | 出典 | 頁 |
|---|---|---|
| | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記 予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014 年 | 206 |
| 『槐記』享保 9 年 11 月 6 日条に「長門ヨリ献上ノ萩」とある | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記 予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014 年 | 221 |
| 『槐記』享保 11 年 4 月 21 日条の萩茶碗は絵が描かれている。『槐記』72 頁 | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記 予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014 年 | 247 |
| | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記 予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014 年 | 269 |
| | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記 予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014 年 | 278 |
| | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記 予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014 年 | 279 |
| 『槐記』享保 13 年 2 月 12 日条では「アタラシキカラツ」 | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記 予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014 年 | 280 |
| 甲斐守＝毛利候 | 千宗室編集「槐記」『茶道古典全集　第五巻』淡交新社、1958 年 | 184 |
| 楠筒内府会一茶入萩 | 千宗室編集「槐記」『茶道古典全集　第五巻』淡交新社、1958 年 | 264 |
| | 千宗室編集「槐記」『茶道古典全集　第五巻』淡交新社、1958 年 | 295 |
| | 千宗室編集「槐記」『茶道古典全集　第五巻』淡交新社、1958 年 | 308 |
| | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記 予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014 年 | 339 |
| 『槐記』では享保 16 年 11 月 22 日の茶事 | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記 予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014 年 | 340 |
| | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記 予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014 年 | 342 |
| 茶碗挿図あり | 千宗室編集「槐記」『茶道古典全集　第五巻』淡交新社、1958 年 | 383 |
| | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記 予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014 年 | 343 |

| 西暦 | 年記 | 席主あるいは場所 | 参会者 | 器種 | 記載名称 | その他の道具 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1723 | 享保 8 年 12 月 12 日 | 近衛家凞 | 吉田幸節（幸雪）、今大路冶部大輔 | 茶碗 | 御茶碗　萩焼 | （懸物）石室画賛、（釜）蘆屋無文　猿蓋、（香合）松鶴蒔絵、（茶入）木葉　橋姫手、（水指）南蛮壺、（花入）カスカイ曲二重常御作 |
| 1724 | 享保 9 年 11 月 6 日 | 近衛家凞 | 上田養安、山科道安 | 茶碗 | 茶碗　御茶碗　萩焼白　養安拝領之 | （懸物）定家卿初瀬山、（釜）蘆屋海棠文歯釜、（香合）金貝大、（茶入）唐物柿、（花入）三嶋高麗、（水指）古瀬戸耳付 |
| 1726 | 享保 11 年 4 月 21 日 | 近衛家凞 | 上田養安、山科道安 | 茶碗 | 茶碗　御茶碗　長門萩 | （懸物）葡萄　日観筆、（釜）瑠座底あしや、（香合）南京赤絵四角、（茶入）蜜手、（水指）瀬戸唐人笠、（花入）葦大二重常御作、（水次）朝鮮手瓶 |
| 1727 | 享保 12 年 5 月 11 日 | 近衛家凞 | 坊城大納言（坊城俊清）、道正庵 | 茶碗 | 御茶碗　萩焼 | （懸物）定家卿書　四品慶賀和歌、（釜）蘆屋折朶釜、（香合）南京四角赤絵、（水指）瀬戸絵織部、（茶入）落穂屑衝、（花入）サヒ竹二重宗和作、（水次）青磁 |
| 1728 | 享保 13 年正月 30 日 | 近衛家凞 | 御園意斎、山本恕軒、ニ三 | 茶碗 | 御茶碗　萩焼 | （懸物）石室禅師画賛、（釜）乙御前写、（香合）朱塗柿、（茶入）小川手、（水指）南蛮縁坐底、（花入）大蕪 |
| 1728 | 享保 13 年 2 月 5 日 | 近衛家凞 | 道正菴、吉田幸節 | 茶碗 | 御茶碗　長州萩 | （懸物）鶉　李安忠画、（釜）鼠鐶付、（香合）青貝山水文香盒、（茶入）小川手、（水指）南蛮壺ヘラメ、（花入）常御作一重ナタメ |
| 1728 | 享保 13 年 2 月 11 日 | 近衛家凞 | 上田養菴、山科道安 | 茶碗 | 御茶碗　萩 | （懸物）印月江真蹟　（釜）乙御前写、（香合）朱塗柿香合、（茶入）小枯、（水指）古備前打込蓋　塗蓋被用、（花入）宗和作二重黒竹コフシ |
| 1728 | 享保 13 年 4 月 29 日 | 近衛家凞 | 御薗意斎、山科道安、鳥井道乙 | 茶碗 | 甲斐守手焼 | （懸物）雅経ノ色紙、（釜）平蜘、（花生）常修院様、（水指）、和蘭陀、（建水）メンツウ（曲物）、（茶入）古瀬戸ノ根抜丸壺 |
| 1728 | 享保 14 年 3 月 29 日 | 近衛家凞？鷹司房凞？ | 山科道安、松下見林 | 茶入 | 茶入　萩 | （掛物）御水尾天皇御感状、（花生）御囲居花生、（水指）備前、（香炉）青磁浮牡丹香炉、（香合）堆朱 |
| 1728 | 享保 14 年 6 月 13 日 | 鷹司房凞 | 近衛家凞、山科道安 | 茶碗 | 御茶碗　萩 | （掛物）後小松院宸翰、（釜）霰、（香合）曲輪、（花生）棗壺、（水指）朝鮮丸形、（茶入）瀬戸芋ノ子 |
| 1728 | 享保 14 年 9 月 13 日 |  | 近衛家凞、山科道安 | 茶碗 | 御茶碗　萩　花三嶋ノ手 | （掛物）竹門良恕親王御文歌入り、（釜）芦屋地文あり、（香合）堆朱牡丹唐草文、（花生）常修院様一重、（茶入）仁清 |
| 1731 | 享保 16 年 10 月 22 日 | 近衛家凞 | 上田養安、山本恕軒 | 茶碗 | 御茶碗　萩焼 | （懸物）後鳥羽院宸筆、（釜）天猫達磨、（香合）紅花緑葉、（茶入）花薄、（花生）カスカイユカミ二重、（水指）南蛮壺 |
| 1731 | 享保 16 年 10 月 30 日 | 近衛家凞 | 山科道安、大町淳安 | 茶碗 | 御茶碗　萩焼 | （懸物）後鳥羽院宸翰仮名御文、（釜）天猫達磨、（香合）紅花緑葉、（茶入）花薄、（水指）古備前、（花生）二重三菩堤院御作 |
| 1731 | 享保 16 年 11 月 21 日 | 近衛家凞 | 道正庵、吉田幸節 | 茶碗 | 御茶碗　萩焼 | （懸物）後鳥羽院仮名御文、（釜）天猫達磨、（香合）紅花緑葉楊茂、（茶入）落穂瓢箪、（花生）夕立　常御作、（水指）古備前　烏帽子形 |
| 1731 | 享保 16 年 11 月 21 日 |  | 淳安、山科道安 | 茶碗 | お茶碗　萩 | （懸物）後鳥羽院宸宸翰、（香合）堆朱　楊茂、（釜）天猫、（花生）三菩堤院殿二重切、（水指）備前、（茶入）廣澤、（茶碗）萩 |
| 1731 | 享保 16 年 11 月 25 日 | 近衛家凞 | 西王寺、松林院 | 茶碗 | 御茶碗　萩焼 | （懸物）後鳥羽院仮名御文、（釜）天猫達磨、（茶入）花すすき、（香合）紅花緑葉、（水指）古備前　烏帽子形、（花生）尺八宗和 |

| 備考 | 出典 | 頁 |
|---|---|---|
| 「萩、赤ノ手、白薬ニテ雲鶴ノ模様アリ」（『槐記』386頁、茶碗挿図あり | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記　予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014年 | 344 |
| | 千宗室編集「槐記」『茶道古典全集　第五巻』淡交新社、1958年 | 427 |
| 『槐記』448頁には新萩 | 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐和子校訂『御茶湯之記　予楽院近衛家凞の茶会記』思文閣出版、2014年 | 360 |
| 大町諄庵会一拙（山科道安）ハ平茶碗ハギ | 千宗室編集「槐記」『茶道古典全集　第五巻』淡交新社、1958年 | 450 |
| 『穆公茶会記』 | 谷晃「茶の湯における萩焼の受容」『古萩—江戸の美意識』山口県立萩美術館・浦上記念館、2012年 | 9 |
| | 粟田添星「第一巻　遠好日記」『酒井宗雅茶会記』村松書館、1975年 | 34 |
| | 粟田添星「第一巻　遠好日記」『酒井宗雅茶会記』村松書館、1975年 | 89 |
| | 粟田添星「第一巻　遠好日記」『酒井宗雅茶会記』村松書館、1975年 | 90 |
| 従江戸未央先生口切会席付来如左 | 粟田添星「第一巻　遠好日記」『酒井宗雅茶会記』村松書館、1975年 | 184 |
| | 熊倉功夫「彦根水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書3、2007年 | 145 |
| 萩焼ではなく、銘が萩の可能性がある | 熊倉功夫「東都水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書3、2007年 | 154 |
| | 熊倉功夫「東都水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書3、2007年 | 161 |
| | 熊倉功夫「毎会水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書3、2007年 | 169 |
| | 熊倉功夫「彦根水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書3、2007年 | 176 |
| | 熊倉功夫「毎会水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書3、2007年 | 181 |
| | 熊倉功夫「毎会水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書3、2007年 | 181 |

| 西暦 | 年記 | 席主あるいは場所 | 参会者 | 器種 | 記載名称 | その他の道具 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1732 | 享保 17 年正月 7 日 | 近衛家凞 | 山科道安、久田宗也 | 茶碗 | 御茶碗　萩焼雲鶴絵 | （懸物）為家消息定家卿加筆除目之事、（釜）蘆屋海棠文、（香合）蓬莱山、（茶入）みるめ、（水指）糸目南蛮、（花生）三斎二重 |
| 1733 | 享保 18 年 11 月 15 日 |  | 入江様、玉ノ井、山科道安 | 茶碗 | 茶碗　上ハ新（新萩） | （掛物）家凞公御懐紙、題雪中梅氷、（香合）南京魁手、（花生）宗佐ノ一重、（水指）瀬戸、（茶碗）上ハ新（新萩）、次ハ黄瀬戸 |
| 1734 | 享保 19 年 4 月 11 日 | 近衛家凞 | 入江様、右京権大夫、山科道安 | 茶碗 | 御茶碗　萩焼 | （懸物）夏珪山水、（釜）_庭松、（茶入）藤四郎尻膨、（香合）伊部焼　蟹、（花生）法師、（水指）青磁瓶子 |
| 1734 | 享保 19 年 4 月 29 日 |  | 准后様、入江様、大門様、山科道安 | 茶碗 | 茶碗　平茶碗 | （掛物）木庵ノ一行、（花生）高麗青磁、（釜）天猫、（水指）黄瀬戸、（茶入）備前丸壺、台天目、（茶碗）朝鮮新渡、平茶碗萩 |
| 1768 | 明和 5 年 | 讃岐高松藩主・松平頼恭、頼真 |  | 茶碗 | 古萩 |  |
| 1787 | 天明 7 年 3 月 18 日 | 酒井宗雅 | 宗價、栄琢、畔柳 | 茶碗 | 薄茶碗　萩割高台 | （花筒）、（水指）信楽、（茶入）織部瓢箪　鉛山本、（茶碗）青井戸、（薄茶器）ふぶき、（薄茶碗）萩割高台、（水指）伊部焼 |
| 1788 | 天明 8 年 12 月 15 日 | 酒井是三 | 雅楽頭、堀本一甫、小島悦右衛門、田中権次兵衛 | 茶碗 | 茶碗　萩 | （花筒）尺八　紹易、（水指）朝鮮　烏帽子筥、（茶入）伊勢春慶、（茶碗）萩 |
| 1788 | 天明 8 年 12 月 19 日 | 酒井相模守 | 雅楽頭、堀本一甫、酒井是三 | 茶碗 | 茶碗　古萩 | （花筒）圓鑑国師、（釜）織部筋写　弥五郎作、（水指）織部手付瓢箪、（茶入）源十郎、（茶碗）古萩、（茶入）石州 |
| 1788 | 天明 8 年 12 月 31 日 |  |  | 茶碗 | 茶碗　萩 | （花筒）二重　松花堂作、（水指）縄すたれ、（茶碗）萩、（茶入）市場 |
| 1856 | 安政 3 年 10 月 26 日 | 流鶯軒 |  | 茶碗 | 茶碗　萩 | （掛物）不昧翁筆、（花入）唐銅細口四方形、（釜）鶴首、（水指）古信楽、（棗）若狭塗、（茶碗）萩、庭焼黒楽、（建水）かねはり形、（香合）染付四方、（灰器）常滑、（水次）腰黒薬罐 |
| 1853 | 嘉永 6 年正月 26 日 |  | 松平越後守（美作津山藩松平斉民）、谷村可順（幕府茶道役）、鈴木宗休、高橋栄徳 | 茶碗 | 替茶碗　萩　任土斎赤 | （掛物）黒絵馬　雪舟筆、（花入）南蛮壺、（香炉）唐銅形象牙ふた、（釜）天猫、（水指）備前、（棗）黒菊、（茶碗）替茶碗　萩　任土斎赤 |
| 1857 | 安政 4 年 10 月 6 日 |  | 奥野藤兵衛、岡島愿達、脇十郎兵衛、橋本太右衛門、白井安之丞 | 茶碗 | 茶碗　古萩 | 花入）玄猪之杵、（水指）画高麗ぬりふた、（茶入）高取、（茶碗）古萩、（薄茶器）朱雲吹、樂吉左右衛門黒井戸形、雲州 |
| 1857 | 安政 5 年 11 月 5 日 |  | 信通、牧越、きし、たせ | 茶碗 | 茶碗　古萩 | （花入）時代籠釣舟、（茶入）高取肩衝、（薄茶器）菊棗、（薄茶碗）志野坪 |
| 1857 | 安政 4 年 12 月 3 日 | 柏原宗量 | 三浦宗味、宇津木宗洗、宇津木宗志、椋原宗収 | 茶碗 | 茶碗　古萩 | （花入）仙台吉村作　竹一重伐、（水指）古備前烏帽子形、（茶入）高取耳付、（茶碗）半須、（薄茶器）黒風吹　塗師半四郎、（薄茶碗）鉛東雪　黒楽一入作、替茶碗　古萩 |
| 1858 | 安政 5 年正月 26 日 | 柏原宗量 | 三浦宗味、椋原宗収、宇津木宗志、柏原宗量 | 茶碗 | 薄茶碗　古萩 | （花入）怡渓作　竹一重切、（水指）南京染付、（茶入）瀬戸飛鳥川手、（茶碗）楽山、（薄茶器）黒棗塗師宗哲、（薄茶碗）高麗、古萩 |
| 1858 | 安政 5 年 2 月 5 日 | 宇津木宗洗 | 三浦宗味、椋原宗収、宇津木宗志、柏原宗量 | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | （花入）染付酒瓶、（水指）丹波、（茶入）瀬戸、（茶碗）唐津三嶋、（薄茶器）一閑古張、（薄茶碗）半須、替茶碗　萩 |

| 備考 | 出典 | 頁 |
|---|---|---|
| | 熊倉功夫「毎会水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 188 |
| | 熊倉功夫「毎会水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 189 |
| | 熊倉功夫「順会水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 191 |
| | 熊倉功夫「順会水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 193 |
| | 熊倉功夫「順会水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 194 |
| | 熊倉功夫「順会水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 195 |
| | 熊倉功夫「順会水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 196 |
| | 熊倉功夫「順会水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 198 |
| | 熊倉功夫「順会水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 199 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 201 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 201 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 202 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 205 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 209 |
| 古萩　箱川上不白書付 | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 212 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 214 |

| 西暦 | 年記 | 席主あるいは場所 | 参会者 | 器種 | 記載名称 | その他の道具 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1858 | 安政5年12月26日 | 宇津木宗洗 | 椋原宗収、柏原宗量、富田権兵衛、柏原徳之進 | 茶碗 | 薄茶碗　古萩 | (花入) 寸度切、(水指) 四方空中焼、(茶入) 高取飛鳥手、(茶碗) 古萩、(薄茶器) 黒嚢、(薄茶碗) 井戸脇、替茶碗　織部かいらき手 |
| 1858 | 安政5年12月13日 | 椋原宗収 | 宇津木宗志、杉原宗瑞、荒居治太夫、松居主計 | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | (花入) 細川三斎作、(水指) 備前ひたすき、(茶入) 唐物、(茶碗) 大徳寺五器、(薄茶器) 黒嚢　塗師常喜斎、(薄茶碗) 火替り楽了入作、替茶碗　萩 |
| 1857 | 安政4年12月3日 | 杉原惣左右衛門 | 井伊直弼、柏原徳之進、青木順蔵、椋原杢、三浦義太郎 | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | (花入) 竹一重切　金森宗安作、(水指) 高取、(茶入) 瀬戸、(茶碗) 高麗呉器、(薄茶器) 黒嚢　塗師宗哲、(薄茶碗) 赤楽了入作、替茶碗　萩 |
| 1858 | 安政5年正月9日 | 青木順蔵 | 井伊直弼、三浦義太郎、杉原惣左右衛門、松居主計、柏原徳之進 | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | (花入) 竹二重切　清水釣玄、(水指) 永楽染付、(茶入) 瀬戸、(茶碗) 半司、(薄茶器) 黒河太郎嚢　塗師宗哲、(薄茶碗) 福山、替茶碗　萩 |
| 1858 | 安政5年正月15日 | 椋原杢 | 井伊直弼、杉原惣左右衛門、松居主計、柏原徳之進、青木順蔵 | 茶碗 | 薄茶碗　はき | (花入) 常住院、(水指) 釣瓶、(茶入) 高取、(茶碗) 半司、(薄茶器) 黒嚢　塗師道志、(薄茶碗) はき、替茶碗　不白手遊 |
| 1858 | 安政5年2月3日 | 三浦義太郎 | 井伊直弼、松居主計、青木順蔵、柏原徳之進、椋原杢 | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | 花入) 竹二重切、(水指) 備前、(茶入) 高取、(茶碗) いらぼ、(薄茶器) 黒嚢　塗師宗哲、(薄茶碗) 萩、替茶碗　黒楽了入 |
| 1858 | 安政5年2月23日 | 松居主計 | 井伊直弼、青木順蔵、椋原杢、三浦義太郎、柏原徳之進 | 茶碗 | 茶碗　萩 | (花入) 竹一重切、(水指) 高取、〈茶入〉瀬戸、(茶碗) 萩、(薄茶器) 平嚢　塗師遊斎、(薄茶碗) 絵唐津、替茶碗　黒楽 |
| 1858 | 安政5年3月23日 | 青木順蔵 | 井伊直弼、柏原徳之進、杉原惣左右衛門、松居主計、三浦義太郎 | 茶碗 | 薄茶碗　はき | (花入) なた籠、(水指) 永楽、〈茶入〉高取、(茶碗) 高麗、(薄茶器) 黒嚢　(薄茶碗) はき、替茶碗　楽一入 |
| 1858 | 安政5年4月13日 | 三浦義太郎 | 井伊直弼、杉原惣左右衛門、松居主計、柏原徳之進、青木順蔵 | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | (花入) 丹波、(水指) 瀬戸一重口、〈茶入〉膳所、(茶碗) 出雲、(薄茶器) 黒嚢　(薄茶碗) 萩、替茶碗　大樋焼 |
| 1852 | 嘉永5年3月13日 | | 辻蔵人、岡嶋七右右衛門、山角弥左衛門、小県清庵 | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | (花入) 花小岩花、(水指) 高取、〈茶入〉仁済、(薄茶碗) 高麗、萩、(薄茶器) 黒小嚢 |
| 1852 | 嘉永5年11月9日 | | 上田文修、奥野藤兵衛、中村久次、小県清庵 | 茶碗 | 薄茶碗　萩写 | (花入) 鐶獅子口花生、(茶入) 唐物写、(水指) 黒楽焼、(茶碗) 雲州焼茶碗、(薄茶碗) 萩写薄茶碗 |
| 1853 | 嘉永6年2月16日 | | 永田権右衛門、青山与五左衛門、中嶋宗達、上田文修 | 茶碗 | 薄茶碗　新はき | (花入) 紐附花籠、(茶入) 高取、(茶碗) 井戸写、(建水) 瀬戸、(薄茶器) ふくへ、(薄茶碗) 新はき替茶碗　黒楽了入 |
| 1853 | 嘉永6年3月19日 | 北野寺亭 | | 茶碗 | 薄茶碗　古萩 | (花入) 木地手附升、(水指) 銅唐もの、(天目) 黒、(薄茶器) 古青地、(薄茶器) 宝珠形、(茶碗) 黒清水焼、古萩 |
| 1856 | 安政3年正月9日 | 中嶋宗達 | 小県清庵、永田権右衛門、青山与五左衛門、西村孫左衛 | 茶碗 | 薄茶碗　新萩 | (花入) 一重切　片桐宗猿殿作、(水指) 湖東染付、(茶入) 瀬戸広沢手、((茶碗) 新萩、(薄茶器) 蒔絵嚢、(薄茶碗) 黄いらほ、仁清 |
| 1856 | 安政3年2月26日 | 椋原主馬 | 宇津木六之丞、宇津木幹之進、武笠源次郎、臼井安之丞 | 茶碗 | 薄茶碗　古萩 | (花入) 竹吹貫置筒　山田宗偏作、(水指) 古信楽、(茶入) 春慶大宇海　鉛むら千鳥、(茶碗) 筋三島、(薄茶器) 蒔絵絵嚢　塗師宗哲、(薄茶碗) 古萩　替茶碗　仁阿弥作　富士之絵 |
| 1856 | 安政3年3月13日 | 小県清庵 | 賤、たせ、中村久次、上田文修 | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | (花入) 獅子口からよし　古田織部作、(水指) 備前たね坪、(茶入) 瀬戸玉子手、(茶碗) 割高台竪手、(薄茶器) 黒中次　塗師藤重、(薄茶碗) 紫野焼、替茶碗　萩 |

| 備考 | 出典 | 頁 |
|---|---|---|
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 214 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 217 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 217 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 221 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 224 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 225 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 226 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 230 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 231 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 231 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 233 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 233 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 235 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 235 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 237 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 238 |

| 西暦 | 年記 | | 参会者 | 器種 | 記載名称 | その他の道具 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1856 | 安政3年3月13日（夕） | 中嶋宗達 | お鉄、宮崎銀右衛門、佐藤善太夫、松宅（宮）十之進、石居大輔、御側女（2） | 茶碗 | 茶碗　新萩 | （花入）竹一重切、（水指）湖東焼染付、（茶入）瀬戸広沢手、（（茶碗）新萩、（薄茶器）高台寺蒔絵棗、（薄茶碗）薩摩焼、替茶碗　赤楽、（建水）古銅 |
| 1856 | 安政3年3月24日① | 岡嶋愿達 | 臼井安之丞、奥野藤兵衛、飯嶋三太夫、今村他門次 | 茶碗 | 薄茶碗　古萩 | （花入）竹花籠、（水指）瓢形高取、（茶入）瀬戸、（茶碗）古萩、（薄茶器）中次、（薄茶碗）阿賀の焼、替茶碗　まつ本萩 |
| 1856 | 安政3年3月24日② | 岡嶋愿達 | 臼井安之丞、奥野藤兵衛、飯嶋三太夫、今村他門次 | 茶碗 | 薄茶碗　まつ本萩 | |
| 1856 | 安政3年4月9日 | 大久保小膳 | 宇津木六之丞、村山丹宮、横地永之助、勝千三郎 | 茶碗 | 茶碗　萩 | （花入）銘　ささなミ　舟　藤村瑞子作、（水指）亀山染付、（茶入）瀬戸織部、（茶碗）萩、（薄茶器）桐蒔絵、（薄茶碗）乾山、黒楽 |
| 1856 | 安政3年9月29日 | 北野寺亭 | | 茶碗 | 薄茶碗　古萩 | （花入）伊賀つくね、（水指）高取、（茶入）鳩物、（茶碗）清水焼、御本三嶋、（建水）木地曲物、（香合）唐物、（薄茶器）朱漆棗　宗哲作、（薄茶碗）朝鮮立鶴、替茶碗　古萩 |
| 1856 | 安政3年9月30日 | 奥野藤兵衛 | 青山与五左衛門、田中懌庵、岡嶋愿達、小県清庵 | 茶碗 | 薄茶碗　萩ひら形 | （花入）角瓶　仁清作、（茶碗）高麗はけ目、（茶入）唐物　まる壺、（薄茶器）時代木地めん取、（薄茶碗）上・黒天目形　吉左衛門作、下・萩ひら形 |
| 1856 | 安政3年9月10日 | 村田大助 | 弥千代様、愛麿様、牧尾、臼井安之丞 | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | （花入）古信楽、（水指）備前、（茶入）古瀬戸、（茶碗）清水六兵衛、（薄茶器）鹿にすすきの蒔絵、（薄茶碗）萩、替茶碗　人形手写、（建水）まけ物 |
| 1856 | 安政3年12月23日 | 柏原徳之進 | 松居主計、村山丹宮、山田甚五右衛門、小県清庵 | 茶碗 | 茶碗　萩 | （花生）一重切宗石作、（水指）永楽了全、（茶入）備前焼、（茶碗）古萩焼、（薄茶器）菊蒔絵棗、（薄茶碗）瀬戸黒絵模様、（建水）宣徳 |
| 1857 | 安政4年正月13日 | 宇津木六之丞 | 愛麿様、大久保小膳、柏原徳之進、中嶋宗達 | 茶碗 | 茶碗　新萩筒 | （花生）南蛮、（水指）真塗手桶、（茶入）勢田焼、（茶碗）高麗、（薄茶器）菊蒔　平棗、（薄茶碗）新萩筒、替茶碗　黒、（建水）備前 |
| 1857 | 安政4年正月27日 | 小県清庵 | 愛麿様、椋原主馬、橋本太右衛門、臼居安之丞 | 茶碗 | 建水　古萩 | （花入）天猫すき形、（茶碗）御本半使、（薄茶器）河太郎　塗師宗哲、（薄茶碗）赤楽筒　富士の御画、替茶碗　黒平　藤波の画、（建水）古萩 |
| 1857 | 安政4年2月9日 | 飯嶋三太夫 | 愛麿様、弥千代様、たせ、牧尾 | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | （花入）南蛮、（水指）古唐津、（茶碗）半使、（薄茶器）黒棗、（薄茶碗）黒楽、替茶碗　萩、（建水）木地曲 |
| 1857 | 安政4年2月15日 | 柏原徳之進 | 愛麿様、三浦五郎右衛門、小林孫九郎、小県清庵 | 茶碗 | 茶碗　古萩 | （花入）朝鮮みみ付、（水指）信楽　えほうし形、（茶入）丹波、（茶碗）古萩、（薄茶器）黒菊蒔画、（薄茶碗）光悦手造黒、替茶碗　宇治朝日、（建水）時代唐銅 |
| 1857 | 安政4年2月27日 | 大久保小膳 | 杉原惣左衛門、村山龍次郎、椋原杢、奥野藤兵衛 | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | （花入）鉄筒宗的模　彦兵衛作、（水指）信楽、（茶入）瀬戸、（茶碗）高麗猪名手、（薄茶器）雪吹　塗り師宗哲、（薄茶碗）萩、替茶碗　雲鶴、（建水）木地曲 |
| 1857 | 安政4年3月15日 | 松居主計 | 愛麿様、舟橋六之進、中野久之進、今村他門次 | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | （花入）一重切　宗佐作、（水指）膳所焼、（茶入）瀬戸、（茶碗）後楽園、（薄茶器）高台寺蒔画、（薄茶碗）萩、替茶碗　金海堅手、（建水）曲物 |
| 1857 | 安政4年3月15日 | 村田大助 | 弥千代様、志津、たせ、牧尾 | 茶碗 | 茶碗　萩 | （花入）四道花入　青磁、（水指）備前、（茶入）瀬戸芋の子、（茶碗）萩、（薄茶器）菊蒔絵棗、（薄茶盌）赤楽　十代丹入作、替茶碗　御本三しま |
| 1857 | 安政4年3月26日 | 新野亭 | | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | （掛物）大徳寺大綱和尚筆、（釜）初代寒雉作　姥口尻張、（水指）新渡雲鶴染付、（棗）高台寺蒔絵、（茶碗）萩、替茶碗　出雲焼、（建水）からかねえるこ、（香合）織部 |

| 備考 | 出典 | 頁 |
|---|---|---|
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 238 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 239 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 241 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 244 |
| 拝領　萩 | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 244 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 247 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 248 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 253 |
| | 熊倉功夫「懐石附」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 254 |
| | 熊倉功夫「安政六年よりの水屋帳、安政・万延年間水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 255, 258 |
| | 熊倉功夫「安政·万延年間水屋帳」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 260 |
| | 熊倉功夫「一紙もの茶会記」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 260 |
| | 熊倉功夫「一紙もの茶会記」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 272 |
| | 熊倉功夫「一紙もの茶会記」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 273 |
| | 熊倉功夫「一紙もの茶会記」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 280 |
| | 熊倉功夫「一紙もの茶会記」『史料　井伊直弼の茶の湯（下）』彦根城博物館叢書 3、2007 年 | 288 |

| 西暦 | 年記 | 席主あるいは場所 | 参会者 | 器種 | 記載名称 | その他の道具 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1857 | 安政４年４月３日 | 村山丹宮 | 椋原主馬、中野邦之丞、三浦義太郎、高田新右衛門 | 茶碗 | 茶碗　古萩　高麗左衛門作 | （花入）釣舟波ノ大徳寺大綱和尚筆、（釜）初代寒雉作　姥口尻張、（水指）新渡雲鶴染付、（棗）高台寺蒔絵、（茶碗）萩、替茶碗　出雲焼、（建水）からかねえるこ、（香合）織部 |
| 1857 | 安政４年４月４日 | 仙人寺 | | 茶碗 | 茶碗　古萩 | （懸物）如前、（香炉）青磁、（水指）青磁、（茶入）銘栄戸、（茶碗）古萩、（建水）唐銅餅ふこ形 |
| 1857 | 安政４年４月16日 | 藤田弾之丞 | 弥千代様、おしつ、おたせ、橋本太右衛門 | 茶碗 | 茶碗　古萩 | （花入）瀬戸、（茶碗）いらほ釘ぼり、（薄茶器）朱面取棗、（薄茶碗）出雲焼、替茶碗　萩、（建水）曲 |
| 1857 | 安政４年４月29日 | 三浦五郎左衛門 | 弥千代様、おしつ、おたせ、橋本太右衛門 | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | （懸物）芭蕉翁筆、（水指）朝鮮、（茶入）仁清、（茶碗）三嶋、（建水）木地曲物、（薄茶器）紫檀中次、（薄茶碗）黒楽、替茶碗　萩 |
| 1857 | 安政４年５月９日 | 舟橋六之進 | 青木順蔵、三浦義太郎、渥美鍋吉、村田大輔 | 茶碗 | 茶碗　萩 | （花入）時代籐組、（水指）染付亀山焼、（茶入）高取、（茶碗）萩、（薄茶器）棗　あちさい蒔絵、（薄茶碗）唐津、替茶碗　黒楽長入作、（建水）曲 |
| 1857 | 安政４年５月９日 | 村山熊次郎 | 愛麿様、大久保小勝、横地永之助、田中懌庵 | 茶碗 | 茶碗　絵萩 | （懸物）車に鶏画讃　松花堂筆　小堀宗甫公　（釜）葉釜草花地文、（水指）兜形古備前、（茶入）古瀬戸、（茶碗）絵萩、（水次）紅毛染付、（香合）唐物 |
| 1857 | 安政４年８月10日 | 奥野藤兵衛 | 弥千代様、愛麿様、さと、牧尾 | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | （懸物）大綱筆、（花入）桑山可斎作　一重切、（釜）雲龍形　寒雉作、（香合）神代栗左近作、（茶入）薩摩、（茶碗）いらほ、（薄茶器）尻はり形　朱の菊絵、（薄茶碗）唐津写　六兵衛作、替茶碗　萩焼、（建水）木地曲 |
| 1858 | 安政５年２月11日 | 西郷銀之進 | 西尾常之丞、渥美源六郎、村田大輔、上田文修 | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | （花入）二重切　瀧本坊乗順作、（水指）南京染付、（茶入）高取、（茶碗）萩、（薄茶器）棗　塗師宗哲、（薄茶碗）黒楽、替茶碗　清水六兵衛作、（こほし）唐銅 |
| 1858 | 安政５年２月11日 | 今村他門次 | 弥千代様、きし、その、小県清庵 | 茶碗 | 薄茶碗　松本萩 | （花入）唐銅　切竹形、（水指）備前、（茶入）膳所、（茶碗）赤楽宗入作、（薄茶器）黒棗、（薄茶碗）松本萩、替茶碗　薩摩焼、（建水）かねゑるこ形 |
| 1859 | 安政６年８月24日 | 広瀬亭 | 椋原主馬、宇津木六之丞、安中佐源太、岡嶋愿達 | 茶碗 | 薄茶碗　古萩 | （花入）一重切　清水釣玄作、（水指）新唐　染付四方形、（茶入）瀬戸、（茶碗）古萩、（薄茶器）次郎棗、（薄茶碗）黒楽了入作、（こほし）木地曲 |
| 1859 | 安政６年２月24日 | 青山亭 | | 茶碗 | 茶碗　絵萩 | （花入）一重切　河上不白作、（水指）湖東染付、（茶入）高取、（茶碗）絵萩、（薄茶器）尻張棗　塗師宗哲、（薄茶碗）御本写　与惣兵衛作、（こほし）曲 |
| 1856 | 安政３年正月13日 | 宇津木六之丞 | 愛麿様、大久保小膳、柏原徳之進、中嶋宗達 | 茶碗 | 薄茶碗　新萩筒 | （花入）南蛮、（水指）真塗手桶、（茶入）勢田焼、（茶碗）絵高麗、（薄茶器）蒔絵平棗、（薄茶碗）新萩筒、替茶碗　黒　渕斎君作、（建水）備前 |
| 1858 | 安政５年２月７日 | 邦之進亭 | 西郷銀之進、中居忠蔵、三浦北庵、白居安之丞 | 茶碗 | 茶碗　萩 | （花入）置筒　松尾宗古作、（水指）角染付新渡、（茶入）瀬戸柳出、（茶碗）萩、（薄茶器）黒棗、（薄茶碗）唐津、替茶碗　黒楽　了入作、（こほし）唐銅 |
| 1858 | 安政５年２月21日 | 横地永之介 | 愛麿様、酒居三郎兵衛、犬塚万之進、天方貞吉、宇津木文之進 | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | （花入）南蛮鮎粽、（水指）備前、（茶入）膳所、（茶碗）高麗竪手、（薄茶器）黒棗、（薄茶碗）萩、替茶碗　志野織部、（建水）曲 |
| 1859 | 安政６年４月２日 | 大久保小膳 | 愛麿様、山田甚五郎右衛文、宇津木文之進、犬塚万之進、田中懌庵 | 茶碗 | 薄茶碗　萩 | 花入）古備前、（水指）亀山染付、（茶入）瀬戸、（茶碗）唐津、（薄茶器）溜塗、（薄茶碗）御本半洲　清水六兵衛作、替茶碗　萩、（建水）木地曲 |
| | 年不詳11月11日 | 寿声庵 | 柏原与兵衛、田中懌庵、田部宗甫 | 茶碗 | 茶碗　萩 | （花入）細口唐銅、（水指）新備前、（茶入）古伊賀、（茶碗）萩、（薄茶器）木地、（薄茶碗）御本半須、替茶碗　黒楽一了作、（建水）もうる |

# Way to the Establishment of Hagi Ware as a Brand-Name during the Edo Period, Considered from Documents such as Records of Tea Parties and Inventories

TOKUDOME, Daisuke

This study attempts to consider how Hagi ware became a brand-name of tea utensils during the Edo period, from the inspection of records of tea parties and inventories of tea utensils.

First, characteristics of Edo period Hagi ware in the Idemitsu collection, as well as the chronology of Hagi ware from previous studies were organized in order to summarize the overall condition of Hagi ware during the Edo period. Next, records of tea parties, inventories of storehouse and utensils were researched, in order to find out who, and people from what social status used these items. The types of tea utensils used were summarized as much as possible, and the reconstruction of people's image toward Hagi ware at the time was attempted. Also, its reception by the tea circle was compared to that of Karatsu ware, as well as to that of Takatori ware which was in the line of ceramics created by the craftsmen having roots in the Korean peninsula. It is to be noted that Takatori ware was favored by Kobori Enshû, tea master of Edo *Bakufu*.

As a result, it was discovered that Hagi ware was promoted as gifts to the Tokugawa shogunate and to the *daimyô* and warlords, as well as to the nobility. After Kobori Enshû's death, Hagi ware was seen utilized in tea parties held by court nobles in Kyoto, gradually its use spreading to tea parties held by warlords. Especially to be noted is that the daughter of Môri Hidenari, the first head of the Hagi clan, was the mistress of the court noble, Takatsukasa Fusashige. This relationship made it possible for him to promote Hagi ware among the nobility in Kyoto. Later, from the latter half of the 18th century to the latter half of the Edo into the Bakumatsu period, it is to be noted that Hagi ware as tea utensils was well recognized and widespread in the world of tea ceremony, to the extent that many copies were made.

出光美術館研究紀要 第二十三号

二〇一八年一月三十一日

編集 公益財団法人 出光美術館

発行 東京都千代田区丸の内三―一―一 電話 〇三―三二一三―九四〇二

制作 株式会社 ブリュッケ

印刷 東洋美術印刷株式会社

© Idemitsu Museum of Arts, 2018

Printed in Japan